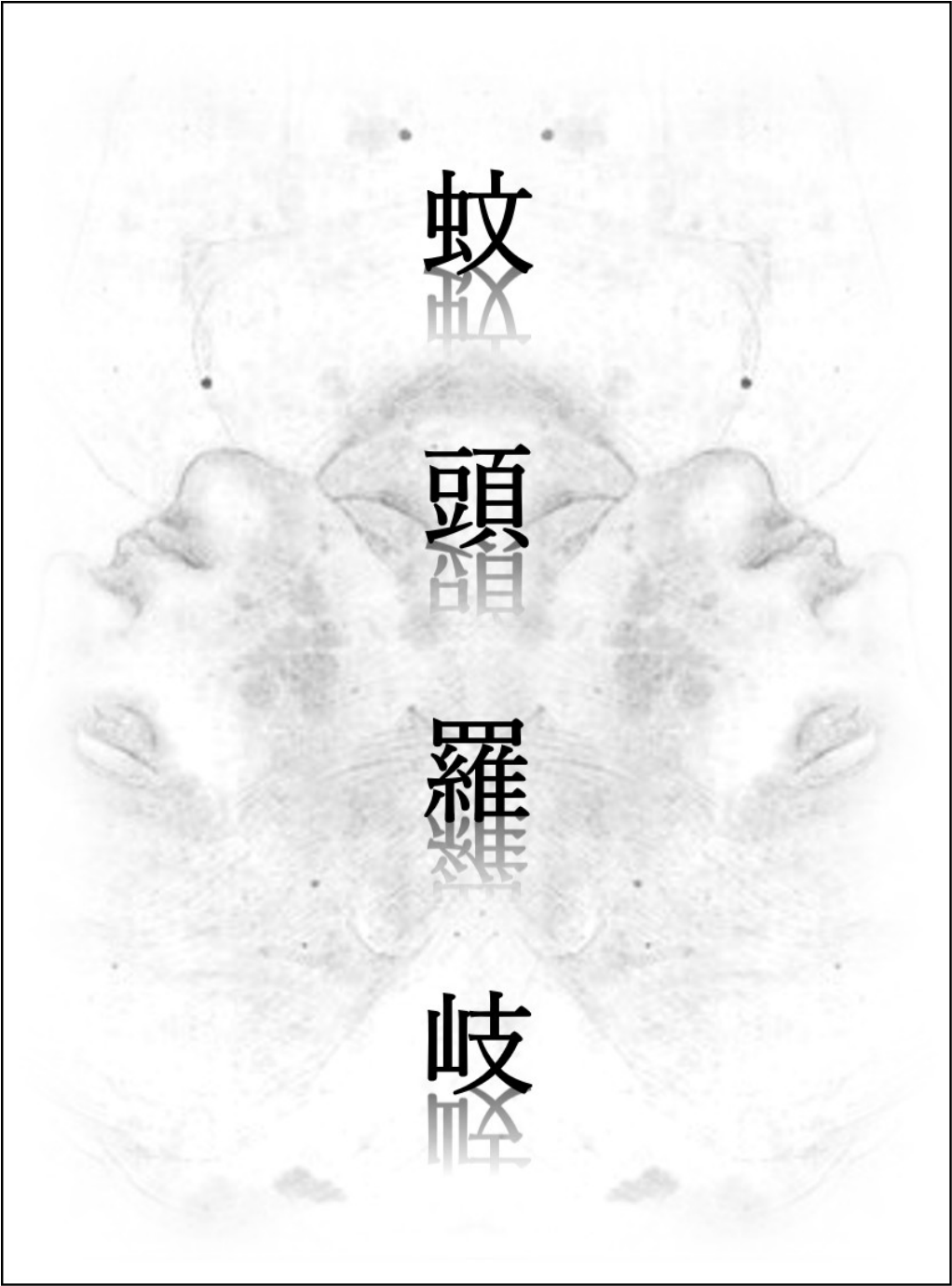


蚊
頭
羅
岐



目次

小亂聲	
小亂聲	3
亂聲	
亂聲一	73
亂聲二	96
亂聲三	144
奧書	158

小亂聲

小亂聲

…シュレーディングの猫の片眼に

或る眼差しの

或るその須臾乎乎乎乎。登乎乎乎乎。意意意意意。許乎乎乎乎乎。呂乎乎乎乎乎。許乎乎乎乎乎。騰淤淤淤淤斗風のむた有雅ノ沙羅は目を見ひらくとよむ風のすでにしてその音つらなしつゞけて遠くに燃える廃墟の色返り見さえすればいつか崩れ斜めに辛うじて残った壁面鳥が止っていたのは知りつゝも鳥の目まばたく故に沙羅は見られていたすでにして鳥の眼に沙羅はも此處にこゝろにだけその鳥に目を奪われて鳥はも厥れくれなみの冠を垂らす額に首筋に嘴に迄も裂けた襤褸頭巾じみてないしあざやかな天鷲絨じみて乃至にぎりつぶした例えばブーゲンビリアの花の残骸だににも似てぶら提げゆらされ思ふ沙羅はその鳥の目それともなくに沙羅に怯えていたに違いないと白地に極彩色の黄と紅長い羽を畳み尾のさらに長い青い色を投げ垂らすものを正面を見るちいさな黒目沙羅にふれないまゝひとりでにまばたいたのを知らずに沙羅はも

人のほゞ滅びた廃墟に見上げれば空は一面の曇った白濁ひろがる黒ずみに青みを潜めて鬱悒しい色ただ單純にだけさらだすにも沙羅は氣附くいま更にその鳥の名前を知らないことに同じきにこの少女が姉の不在を想い附いたのをも鳥は棄て置く有雅阿憂迦がなにも告げずにただ小便に立つようにして沙羅の傍らをはなれてから数えればおそらくは半時間ほどのしかすがにとよむ風のむた沙羅の周圍を掩う死人らの色のない翳り厥れら自らの畸形の躯体に散らされる獰孔という孔に燃え立つ炎夥しくに纏う死人ら或はねじ曲がった腕を三股にも分けて泳がせる觸手じみた血管らしき管を無数にも或は喉に開けた燃える肛門に引きずり出された内臓さかしまに聲なくも蠢かせて脉打たすその肉を或は獰に陽炎引き裂かれた口蓋そこに長い舌まるで繁茂する葦の莖のようにして足立つものを厥れら翳り陽炎のひとつ開く沙羅の右の頬の至近に口を厥れ獰の匂い嗅ごうとする沙羅は薫れ匂いもなければ觸感もない儘に返り見もせず沙羅の思へらく鳥は羽搏くと飛び立ったのか或はもうひとつ鳥は舞い降りたのか敢えて知ろうともしなければその羽搏きを聞いた沙羅に迦睨呂比ノ斯毗登迦多羅久かク聞きゝムかシ比登と云ふ地に有り夫レ土に這ひ天都ノ船に空ノ低きを飛備聽而躬ヅから立てたる塔ノ影ゝに躬を曲げき乃爾儂なミ口に鼻に躬づからの血ヲ吐くそれ比登之末ノ世の始めノころ惡疾はビこりミな疾ミ痛ミきがゆゑ也キかくて終わりの比のはじめつかた古布ノ斗璃麻沙及び古布ノ斗璃伎與と云ふ男あり雙兒に生まれたりきそノ生まれたる時母即チ此ノ雙兒に胎を貸シたる女名を陶麻嫩と云ふノ沙沙夜祁良玖

あげる悲鳴

ひき千切れるに似た
その聲は誰のものか知っていた
痛み。燃え上がるような
わたしだけは。いくらも数え盡くされないほどの
痛み。内側から
膨大な時間のなかに
大きすぎた獣の無数の歯に噛みつかれたかにも？
あえぎつゞけた。息。それら
痛み。背骨が軋むその
あられもない性交の聲じみて
痛み。骨盤が引き攣るその
それら
傷み。知る。いまだふれていない喜びがもはや
あられもない虐待の聲じみて
すぐそこに大きな口を開けて
それら
飲みこもうと待った
わななくだけのノイズ。聲と息の
わたしだけを
ただの騒音。わたしの喉に
歓喜は
喉の奥を
わたしをその喉に流しこもうとする
みづから咬みつき嚙みちぎろうとながら
むしろひたすらな絶望
わたしは目を剥く
出口のない
わたしは叫んぶ
逃げ場のない
だから叫んだ
むしろひたすらな絶望
かくて
ひろがった口に
古布ノ陶麻美爾に
その喉に
都舞耶氣良玖
聞いた。
不意に。
聞いた。
不意に響いた息を飲んだ音を。

ひらいた足の纒かな先に。
誰の？
聞いた。
わたしは。
看護師の。
誰の？
その馴れた助産婦の喉の立てた不用意な音。
息を飲んだ。
たゞ一度だけ。
失神したに違いない。
わたしは。
なにもなかったから。
もはや。
わたしに。
その一瞬だけ。
苦痛は。
もはやなかったから。
その一瞬だけ聲は。
聞こえなかった。
苦悶するわたしの聲ももはや。
聞こえなかった。
絶望するわたしの聲も。
聞こえなかった。
飲み込まれた息の音。
その記憶。
それ以外には何も。
意外だった。
喜びは開いた股の向こうに口を開けたままになぜそこに敢えてとどまったのか。
そこで。
口を開いたそのまゝに？
なぜ。
泣き聲は？
ことごとくの生まれた落ちたことごとくの喉の立てるべきことごとくの厥れ。
泣き叫ぶ聲は？
動く。
体内に停滞したままのもうひとつのイノチのかたち。
だから叫んだ。
ふたゝび。
わたしの口は。
だから叫んだ。

もう一度。
同じように。
すでに自分の意思さえ何もなくて。
まるで他人のように。
彼女の明らかな意思を持った肉躰が力む。
わたしの筋肉に。
だから力んだ。
わたしの腿は。
下腹部は。
全身も。
なおもそれでもわたしの喉にだけその血の味を逆らせて。
筋肉に傷み。
なおもそれでもわたしの喉にだけその血の味を逆らせて。
感じた。
わたしは。
力みながら。
ぬるぬると。
感じていた。
ぬらぬらと。
体中が汗の油になったように。
光。
すでにわたしは失神しそうな肉躰のだれかの眼差しのなかに。
光。
綺羅めく一点のそれ。
白濁の光。
聴て。
おなじ聲を股の向こうに聞いた。
違う助産婦の。
だからその喉は息を飲む。
ふたゝび。
違う女の喉に同じ音響。
とてもみじかい一瞬の。
厥れ。
咬み砕くようなひゞき。
わたしは知った。
苦痛の時はすでに終わったのだと。
だから知っていた。
絶望の時はすでに終わったのだと。
驚く。
その停滞に。

ひらいた股の引き攣る向こうに喜びはなおも口を開いて。
だれも飲み込まないまゝ。
その停滞。
すべて他人事じみて。
わたしがひとり捨て置かれた停滞。
だれからも忘れられたに違いなかった。
わたしはすでに。
いまゝさに。
そんな莫迦なと思う間もなくつぶやく。
他の看護婦が。
他人の耳元に。
頭の上の後ろの方に。
なにを？
なにかを。
なにを？
声を。
聞き取れなかった。
わたしには。
聞き取られもしなかった聲。
一度も記憶さえされなかった聲。
だから忘れられもしなかった。
いつかのさざなみの音響のひとつにも似て。
いつかの風の木の葉の響きのひとつにも似て。
思い出すようにわたしは気附いた。
ふたゝび。
聞かなかったことに。
その声を。
私の耳は。
その声を。
泣き声を。
生まれた雙つのちいさな命の。
そのイノチ。
あきらかに存在したイノチのあたらしい喉の泣き声を。
聞いた。
沈黙と息遣いを。
複数の人。
抱き上げて駆け去った助産婦たちの足音。
衣擦れ。
白衣はすこし硬いらしい。
白衣はすこしこわばるらしい。

わたしは聞かなかった。
あらゝがせながら。
胸をも腹をも。
わなゝかせながら。
わたしは聞きはしなかった。
雙りのイノチの泣いた聲をは。
だから吸い込む。
私の肺は。
泣いた聲のひびくべきだったその空気を。

かくに聞きゝ斗璃麻沙又斗璃伎夜ノ布多利ソノ躰重き畸形にして肉腫ソノ顔の鼻筋カラ唇の眞ん中を掩ヒ肉腫ソノ喉に同化シ背骨を曲げさせ肉腫ソノ胸にツながら胸を曲げさせ肉腫ソノ肋骨をゆがませ胎に纏ハリ肉腫ソノ胎ヲも曲げさせ陰囊にマで喰ヒ付き肉腫ソノ陰囊ヲ隠シて太ももをさかしまにシ厥レ腫瘍の大き脉打チ瀧みテ糜れタリキ故レ集中醫療室に運バレ延命處理サレたり醫師ら又看護婦ら誰もが思ヒけらく既く失せたるに違ヒナシト又醫師ら及び看護婦ら思ヒケらく既く失せたるに同ジと故レ雙兒ソノ死に失せつゝある時を生き延びテすでにシて一週間經チたれば爾に醫師ら庵麻美に對面させムとス于時布嫩哥は庵麻美が爲に歎きゝ且ツは布美香ハ多摩美が爲に怖レキ所以者何布嫩迦是レ多摩嫩が母親ナルが故ナリキ故レ布嫩果ひとり娑娑彌氣囉玖

もうすぐ逢えるよ、と
死んで仕舞えばよかったと？
言ったのだ
死んで生まれこそすればと
娘に。あなたのこどもたちに
言った。その沈黙の言葉に
もうすぐ逢えるよ、と
彼等は云った。顯らかに
その晴れた朝にも。わたしは
白い医務服に清潔な眼鏡
つぎの朝にも、娘に
脳波にもありきらかな以上ありと
云ったのだ。そのつぎのつぎのたとえば曇りの
むしろ
朝。つぎの雨の朝にも
それこそが或は救いかも知れないと
もうすこしだよ、と
その沈黙の言葉で。生まれた事さえ
双子だからすこし手間がかゝるけど
気付かなければ
もうすこしで逢えるよ、と
むしろ、とやさしい眼差し。その沈黙の言葉で

逢うことをためらい続け
苛酷の認識も無く
求め続ける
もうすぐ死んでいくのならば、と
矛盾した目に。もうすでに
その狂ったイノチはむしろ、と
かけがえもない
かくて
尊い命はきらきらといまも猶も
布美迦爾に
かがやいてるからね
都儼耶氣良玖
特別な育児装置の向こうに存在していた。
生まれた子はふたり。
垂れた幾本ものチューブと機材。
機械が立てた肺の音。
電子音が鳴らす心臓の音。
存在していた。
自分一人では生きられもせずに。
父のないふたりの子のひとりが生んだ子が。
父のないそのふたりの子が。
思い出す。
わたしは何度も。
執拗なほどに。
思い出す。
なぜ？
記憶があるから。
なぜ存在したのか。
記憶など。
むしろ白癡であれば？
一人の子が生んだ雙りの畸形のイノチ。
彼らのように。
むしろ白癡でこそあれば。
泣く聲もなく
瞬きも無く。
黄變した白目に。
小さい黒点。
まるで擬態したような彼等の目。
むしろ白癡でこそあれば。
醫師は云った。

生まれた赤児を血の紅に汚したまゝ運び出すその産褥固有の匂いの沁みた二度の駆け足の終わったあとに。

そのまま集中医療室に運び込んだ後に。

生んだその父なしの一人の生んだ子を。

臍中にチューブを差し込んだ後に。

さゝやくように。

——問題が…

醫師は云った。

——若干、問題が…

歎くようにも

——気をしっかり持ってね？

醫師は云った。

——お母さんの方にはまだ…

はげますようにも

——ですから、お母さんが、しっかりしないと…

醫師は云った。むしろ

——若干…

自分の心の痛みをおし煞したようにも

——妊娠中に胎内の確認しとけば

醫師は云った。

——早めにね。…早めに分かったんでしょけど…

ひそめた聲に。

——されなかつたらしいね。検診とか。

醫師は云った。

——なんで？

わたしは見つめた、その

——ともかくも。

两眼。おちつきのない

——若干の、

揺れ動きの眼に

——畸形なの？

わたしは云った。

——畸形なんですか？ いま、ちょっと、かつぎ出されていくの、見たけど、あれ…

——畸形って、それは

——違うの？ 出来損ないなの？

——それはもう、…だって、それ、本当に差別用語だからね？

——なに言ってるの？ と。

あれは、と。

なに言ってるの？ と。

あれ、私の孫よ…と。わたしは叫んだ。

極度にひそめたつぶやき聲で。
醫師の目の前。
ひそひそ叫ぶマスク越しのその聲に。
——私の孫ですよ。畸形なの？ 出来損ないなの？ まだ生きてるの？ 生きていけるの？ 死ぬの？ 死んだ方がいいの？ これからどうなの？ どうなるの？
聲のむれ。
わたしは聞いた。
自分の周囲に群がる聲を。
それ。
自分の喉の吐いたさゝやき。
無数のさゝやき。
それら。
散乱。
——まだ、判らない。
醫師は云った。
——残念ながら、普通とは違う。それは事実。特殊なので…
——見た。わたし。ちょっと見た。
——そう、ただ、現状
——さっき…
——生命活動は持続している、と、
——看護師さん、あわてゝ抱いて走って行ったね？
——今のところ
——あれ、殺しに行ったの？
——ひょっとしたら助かるかもしれない。ただ
——あれ、処分にいったの？
——いつまで生きていられるか
——あれ、ト殺したの？
——まさか。
——ね？…なに？
——大丈夫、だれも
——何が起きたの？
——だれも殺さない。
——何が起きてるの？
——だれも悪いようにしない。
——わたし、なにを見てるの？
——だれも、いまだってみんな
——誰が悪いの？
——誰も悪くない。
極度に冷酷な眼を。
耳元に叫んだ醫師の。

雙つの眼を見てそのままに。
その目の前に。
倒れ膝をつく女。
ぶざま荒い息遣いを吐きつづけた。
それはあきらかにわたしだった。
汗をにじませた湿った肉躰。
その穢ならしさ。
匂う。
あきらかにそれはわたしだった。
やゝあって数時間後に两眼は見た。
特別な保育器の中に安置されたそれ。
うす桃色の。
白い。
まばらに散る赤斑。
細菌にでも喰われた似て。
森の奥の人に知られないめずらしい花の稀なる花卉の模様にも似て。
蝶の羽根の鱗粉のみだれ？
見た。
看護師のふたりに俱われて。
私の两眼は。
生まれたばかりの雙つの肉躰。
チューブと管の流し込む液体。
淡い色の透明な色彩。
薬の馨を纏う。
肉の塊り。
わたしは見ていた。
聲も無く。
慄き。
それ。
せきらゝに。——その、目の捉えたそれ。一瞬に。
怒り。
だから怒り。
聲も無く瞋り。
それ。
せきらゝに。——その、目の捉えたそれ。一瞬に。
聲も無く。
笑い。
それ。
せきらゝに。——その、目の捉えたそれ。一瞬に。
聲も無く。

切なる悲しみ。…齧まれるに似て。

それ。

せきらゝに。——その、目の捉えたそれ。一瞬に。

同じくすでにわたしは今やその鳥肌立った肌の下に。

終に。

わたしは許した。

もはや。

すべての醜悪。

ことごとく赦した。

すべての異形。

それでもせめて人なみに生きよと。

わたしは祈った。

その死は安かれと。

祈る。

心に。

だから矛盾を。

莫迦でもわかる赤裸々な矛盾。

祈りを。

誰でもわかる矛盾した祈りを。

かくに聞きゝ多摩嫩をふたりに對面させルそノ前に布美迦病室に見舞ヒ耳元にさゝやけらく——だいじょうぶだよと、故レ答へけらく——だいじょうぶって？ ト故レさゝやけらく——だいじょうぶと故レ答へけらく——なにが？ と故レさゝやけらく——なにもかもと故レ答へけらく——なに？ と故レさゝやけらく——ぜんぶ、だいじょうぶト故レ布嫩哥見たりキ至近に陶麻嫩ノ兩の眼の布美香を見詰メ言葉も無クにしかすがにあきらかに微笑みてあるを布美香は見き故レ布嫩哥たダ陶麻美が爲にのみ笑みきかくて陶麻嫩ひとり娑娑彌氣囉玖

すでに

なにを怯えているの？

心はすでに

あなたの眼は

知っていながら

慈愛に盈ちようと

それ知らないという赤裸々な事実が

やさしさにだけ充ちようとした

ゆがんだまゝに咬みついた

いつくしみだけに盈ちなければならないと

心がやわらかな

ひとり確信したあなたの目は

苦しみの褪めない

無防備に怯え

味を咬むので
かくて陶麻嫩爾に
だからわたしはひとりでに
都舞耶氣良玖
連れていかれた。
母に。
わたしは。
桂樹文果に。
振り返った。
わたしに背を向けた彼女は。
何度も彼女は振り返った。
確認した？
わたしが彼女に連行されるのを。
確実に。
思うが儘に。
容赦もなくに。
確認する？
いわば私の連行が成功している事実を。
振り返る何度もの眼差し。
きれいな擬態のほゝ笑み。
わたしをだけを歎くに似て。
その空間の中に。
わたしだけをいつくしむに似て。
その空間の中に。
何をも見ない。
厥れ。
怯えた目は。
わたしをも。
何をも見ない。
厥れ。
私の何をも。
なにを見ているの？
振り返る何度ものあなたの目は、と。
思う。
わたしはここに存在してゐないに違いないと。
思う。
もはや。
影だに存在してゐなかったに違いないと。
思う。
彼女にとっては。

すくなくとも。
こゝにいるよ。
無関係に。
あなたのやさしさともいつくしみとも又はその深い深い歎きにさえも。
無関係に。
あなたがいま消えてなくなっても。
なんのかわりさえも無く。
こゝにいるよ。
わたしは自分ひとりで。
でこゝに存在してあるよ、と。
せめて彼女の耳にさゝやけば？
文果は怯えるに違いなかった。
文果は恐怖するに違いなかった。
わたしはだから加害者だった。
わたしは彼女の怯えそのものだった。
わたしは彼女の恐怖そのものだった。
心配しないで。
斜めに差し込む日差しにさされて。
笑ってよ。
厥れ。
午前の朝日。
連行されるわたしは彼女の背を追った。
わたしはすでに知っていた。
おそらくは。
そこに待つ何かがある何かを。
おそらくは。
わたしはすでに気付いた。
おそらくは。
何も知らないまゝに。
慥かに。
すべてが未だ謎めいたまゝに。
知っていた。
すべてがいま顯らかに誰も解き方を知らない謎以外のなにものでもないことを。
大きな謎が口を開けた。
なかった。
立てらるべき叫び聲さえ。
なかった。
立てられるべきさゝやき聲さえ。
喉に息を立てる自由もなくて。
喉に息を立て得る可能性もなくて。

彼女は見たに違いなかった。
振り返る文果に目があれば。
その眼。
わたしのやさしい微笑を。
文香の爲にだけ作ったそれでもなおも自然な微笑を。
だから日差しはさした。
冬の日差しを。
雪さえふらせないそのまゝに。
零度に沍える雨の氣配の無い冬に。
如月の光。
冴えた冷気に。
わたしはひとりで。

だからひとりでに微笑みかくに聞きゝ保育器がうちに異形なル斗璃麻沙又斗璃伎夜が
雙り顯らかに息てありキ故レ生きたる異形を多麻美ハ見たりき布美香の背後に目ヲ見開
きテかくて随麻美ハ雙つに同ジき誰とも異なる宇都那琉かたちをそノ目に見たりき故レ
随麻美思はずに笑ミテ暫し異形ヲ見詰め瞬きて故レ随麻美思はずに聲立テて笑ヒかくて
随麻美なにか云ハんとシて口開きたルママに言葉をダにモ失ひき故レ布美迦ひとり娑娑
彌氣囉玖

泣きなさない
開いた口が
啼きたいのなら（——それは鳥のせめても擬態）
その上げた悲鳴を聞いた
それでもなおも
聲のない絶叫
微笑みなさい
音の無い絶叫
啼きたくとも（——それは墜ちた鳥の最後の擬態）
顯らかに
もうすぐ死んでゆく
あなたは叫んだ
それら
誰の耳も
雙つのイノチの
沈黙の叫びを聞きながら
異形のイノチの
あなたの叫びを聞きながら
最後の爲に
かくて
それでもなおも
随麻美ひとり

あなたの顔は
爾に都舞耶氣良玖
いぶかしんだ。
その畸形。
かわいゝ、と。
どこから？
その異形。
かわいゝ、と。
したゝるお乳は。
かわいゝと。
せめて最後にわたしだけはさゝやくべきだと。
どこから？
せめて最後にわたしこそはさゝやくべきだと。
口のどこから？
わたしは思う。
畸形の唇のどこからおっぱいは含ませられるべきなのか？
だから。
あなたは思った。
さゝやきなさい。…かわいゝと。
わたしの母は。
その眼差しに不穏な強制を。
ゆがんだ唇。
振り返もせず横眼に伺った。
その凝視。
わたしをそっと凝視したそのゆがんだ眼窩。
文果は息をするのもわすれて。
畸形の口よ。
あなたの畸形。
心に言葉のすべてをひそめて。
ゆがんだ口よ。
あなたのゆがみ。
わたしを見ていた。
まがった唇。
あなたの彎曲。
看護師は四十女の微笑を造る。
まなざし。
わたしの二つの眼の正面に。
保育器の向こうに。
彼女は見ていた。
目を剥いて。

唇でだけ微笑みを作り。
強制を。
わたしに無言で強制を。
強制を。
わたしは無言で。
微笑みなさい。
さゝやきなさい。
かわいゝと。
それでもなおも。
かくて爾に布彌迦
かわいゝと。
都儼耶氣良玖
ことばはすべて凍りつく。
口を開いた口蓋の暗闇に。
とどろく叫びはたゞ無音の静寂。
わたしは見ていた。
その女。
わたしの生んだその女。
生みだした。
雙つの畸形を私と同じかたちの体内から。
生みだした。
わたしが彼女を吐き出したと同じように。
生み出した彼女は停滞させた。
その剥きひらいた雙つの眼を。
痙攣。
黒目。
残酷？
なぜ？
うまれることがいかにしてゞも残酷であり得るなら。
イノチの尊厳はどこにあったのだろう。
わたしは知った。
残酷でさえあってはならなかった。
なにものも。
残酷でさえあってはならなかった。
その剥き出しの見開いた眼にも。
乾いた黒目にも。
わたしの目がひとり剥き出しの絶望をだけしっかり見えても。
猶も見出しつゞけていても。
なにものも残酷でさえあってはならなかった。
なおも必ず。

この今に至ってさえすでにかくて布美迦ハ見キ何ヲ目を開けたる儘陶麻美さらしたる彼女の失神をかくて布美迦は見キ何を口をひろゲたる儘陶麻美頰レたる彼女ノ後ろ向きノ失神をかくて多麻美爾に娑娑彌氣囉玖

卑怯だと

鳴き聲は？

思った。すでに

そのゆがんだ口

失神しながら

塞がった

冴えた意識に白濁

腫瘍の瘤の覆いかくした

意識の沈没。すでに、とその共存

その唇は

卑怯者だと

啼き聲は？

こうしてわたしは愚弄していた

どうやってその子は泣き叫ぶのか？

生みの母胎は愚弄していた

どうやって息は吸い込まれるのか？

被害者づらして。ひとりだけ失神しながら

畸形の口は

憐れな子供を

めくれあがって

あざ笑いむしろ失敗作だと

爛れた色を

愚弄した。失敗作だと

肉の色さえ

かくに聞き、陶麻美に

嫌悪した

父親二人ありき一人は名ヲ迦豆羅岐ノ天都遠と曰フ此ノ比登すでに失せたりき是レ陶麻美六歳が時なりきかくて一人ハ名ヲ迦我ノ伎與麻沙と曰フ此ノ比登息て有りたりき是レ多麻美十歳が時に布美香ヲ娶りき比登らノ口云ひけらく伎與麻紗善男子なりト且つは慈愛に満ちたりきと且つは故レ布美香幸多からムと且つは多麻美幸多からんと又かくに聞き、雙兒に父親ありキ名ヲ曰く古布ノ陶迦伎と此ノ比登すでに父なかりき又母もなかりき二人俱なりテすでにシテ陶果伎十九の時に失せハてにき是レ交通事故が故なりき故れ同じきに俱なりて失せたりきかくて雙兒生ミたる時陶迦伎が齡十九歳なりき陶迦伎同じくに十九歳なりき故レ雙り俱に十八歳にして婚姻せり布美迦かつて多麻美が口の胎に兒宿シたること告げたる時に怖れテ慄き、後瞋りて罵りき後歎き悲シみき後伎與麻沙になダめられたれば臆而赦シき多香枳飲食店に就業せり故レ出産には立ち会わずにきかくて明けたる朝布美迦に俱なハれて對面シたりき故レ多香枳爾に雙子を見テ歎きて娑娑彌氣

囉玖

罪

なにかの間違いに違いなかった

誰の？

だれかの裁いた必然だっと

だから俺は探すのだ

仮りにそれが

罪を

あまりに無垢な偶然だったとするのなら

だれかが何処かで犯した

雙兒の無残を誰がつぐなうのか

罪の罰

雙兒は無残を

罰された子たちの爲に

如何に償うのか

罪をかぶった子

ぼくは罪びとになろう

穢れた子

禁じられた罪に塗れた

彼等の爲だけに

徒刑の男になろう

例えば雪の積った眞白の色

わたしの恥ずべき罪をかぶり

例えば絹の綺羅の光澤の色

石もて打たれるべき罪をかぶり

それにさえ

悲劇の子

俺はすでに罪を探した

だから無垢であってはならなかった

だれかがどこかで犯した罪を

呪われた子

誰の？

あまりに無垢に

誰かの

息遣おうと。すでに

生まれながらの顯らかな罪を

僕に殺されていた

かくて多香伎爾に

その罪を

都儂耶氣良玖

思い出す。

彼女は云った。

——ね？

——なに？

耳元に。…記憶。

そのさゝやきの。

——生まれたら、…

——子供？

記憶。

そのさゝやきは。

——育てるんだよね？

——当たり前じゃない？

記憶。

そのさゝやきに。

——なんか、さ。

——なに？

記憶。

そのさゝやきの。

——信じられない。

——なにが？

記憶。

そのさゝやきに。

——生むんだよ。わたし…

——がんばれ。

記憶。

そのさゝやきは。

——育てるんだよ。ふたりで…

——がんばるよ

記憶。

そのさゝやきの。

——信じられない…

——信じられるよ。

記憶。

そのさゝやきの。

——大丈夫かな。

——なんで？…なにが…

記憶。

そのさゝやきに。

——信じられない。

——俺が？

記憶。

そのさゝやきの。

——本当なの？

——信じろよ。俺、

記憶。

そのさゝやきは。

——だってさ…

——俺、がんばるからさ。今より、

記憶。

そのさゝやきに。

——これ、ね？

と。

つぶやいて加賀珠美はわたしにさゝやく。

ふたゝび。

不意にわたしを振り返った。

そのふれあう距離の中に。

珠美はさゝやく。

——これ、現実？

臨月の胎を撫でた。

笑った。

他人の胎をなぜるように。

その手のひらは。

左の。

いまだに夢を。

他人の夢を見ていたように。

不細工さ。

わたしは笑った。

珠美の不細工さ。

目を覆いたくなる。

邪気も無いその無様さを。

臨月の胎を。

膨張した不器用な歩み。

まともにかゝめもしない畸形の膨れあがった生き物。

起き上がれもしなかった。

一と息には。

ころびそうにしか起き上がれない不格好な異形。

わたしは笑った。

泣きそうになる幸せと共に。

彼女の無様をすこしでも。

纒かでも。

この身に感じようとした。
せめて夢にでも。
その重さのかけらでも。
わたしは笑う。
所詮は他人の無様を愛しむ。
泣きそうになる幸せと共に。
思い出す。
それらの記憶を。
目の前の。
まぎれもない。
失敗の異形。
組成の過失。
生育の不順。
生成の不具合。
息であることそれ自体さえ悲劇だと。
取り返しのつかない損失なのだと。
大声でさげんでいた。
そのカタチは。
だれの目の網膜にも。
大声でわめいた。
彼等の異形。
その顯らかな畸形。

多麻美雙兒に對面したる日夕方六時に多香枳見舞ヒて相ひ語りて云ヒけらく——見た？
と故レ答へけらくは——見たよトかくて陶麻美かスかに笑みて躬ヅからを返り見たルが
多香枳たダ愛シク且つは多香伎切なク且ツは多香伎いジらしくたダ悲シくて思はずに涙
だにモこぼれンとするをこラえレば爾に云ヒけらく——どう？ と故レ

——ね？

——なに？

——ね？

——なんだよ。

——だいじょうぶかな？

——なにが？

——わたしたち？

——お前、大丈夫？

——育てられるかな？

——なに？

——あのこたち…ト多麻美答へるが愛シければ爾に多香伎そノ口にさゝやきて云ひけら
く——大丈夫だよ

——ね？

——なに？

— どう思う？
— なに？…育児？
— じゃなくて、
— じゃ、なに？
— かわいい？
— あのこ？
— あのこたち。
— かわいいのかな？ と多麻美答ヘルが愛シくて爾に多香伎さサやきて云ヒけらく——
たぶん、ね
とさゝやけらく
— いろんなやつが…
とさゝやけらく
— いろんな…いろんなことって
とさゝやけらく
— いろんなこと、して…
とさゝやけらく
— いろんなかんがえかたあって…
とさゝやけらく
— たぶん、そのぜんぶがどっかで、どっか、ただしくて…
とさゝやけらく
— でもさ
— なに？
— でも…
— なに…ね？
— ん？
— いて
— それでも、
— なに？
— それでもやっぱりかわいいとおもう
かくて多麻美黙止シて見つメき
— 俺はね…
そノ多香伎を見詰め
— やっぱり。
とさゝやけれ多迦伎を見ツめかくて多麻美爾に多香伎と俱なりテ娑娑彌氣囉玖
嘘を
 血がながれだすほど
あなたはあきらかな
 絶望的なまでに
嘘を
 血があふれだすほど

まちがいもなく嘘に過ぎない
あまりに完璧な
嘘を
ぼくたちの
あなたは
真実
まごころのままに
知ってる？
だれの爲に
ぼくらはこうして幸せになる
何の爲に
あしたぼくたちは
わたしたちは
幸せになる
かくて多麻美
絶望的なまでの
爾に
ぼくらの真実
都儼耶氣良玖
逆光の中に。
背後に窓。
その逆光の中に。
あなたの背後に光。
あわい。
だからあなたは逆光の中に。
ささやくふたりの私たちの聲に。
忘れなかった。
見殺しにされた双子たちは息をしていた。
忘れなかった。
捨て置かれた双子は息をしていた。
ただ彼等の必然として。
かれらは彼等の息を吐いた。
あわい光の中に。
その逆光の中に。
かすかに笑んだ。
はっきりと。
それはあなたの。
だからあなたのほほ笑む眼差しを見た。
私を。
おそらくは。

わたしの頬のそのほほ笑みを。

だれも嘘などつきはしなかった。

どこにも嘘はありえなかった。

だれも嘘などささやかなかった。

かく聞きゝ多迦音友らに云ヒけらく——俺、「ね？」…おれがね。「わかる？」しっかりしないと。…生まれた子に障害「嘘ばかり」障害が在ったから…しかも「自分に対しても」双子じゃない？ だから…俺、「大丈夫かな？ 俺」死ねないからね。俺、「壊れてるかな？」老いぼれて行けない。…あのこたち「…違うか。」何歳まで生きてられるからわからないけど。「でもさ」…けど。「自分でわかる」あのこたち「折れたら」俺が「心、いつか」何歳になる迄「心折れたら」生きてるのか、たぶん「俺、何するかわからない」神様だって、…ね？「俺の言うこと」だれも。「全部うそ」…誰も「なんで？」判らないには違いないんだけど。死ねないよ。「ぜんぶ」俺。「うそ」耄碌できない。「なんで？」譬え90歳…「だってさ」百歳？…その上の「自分がはっきり確信してる、想い、はっきり言っても…たとえばあいつに対しても」百十歳とか？「嘘」けど俺、「いっつもそう思う」あの子たちの爲に「嘘だよ」生きるからね？「お前嘘謂ってるよって」あくまでも「なんで？」生きなきゃいけないから「なんでそう思うの？ 俺、…」だからと云ヘルその時にモ返り見夕窓の向こうに空ノ青を見ふいに多香枳思ヒけらくは俺は今と俺は今生きてるト

かくてひとり娑娑彌氣囉玖

微笑んだ。

むしろ私は。

その時には。

いまゝでにもなくはっきりと。

わたしの頬はほゝ笑みを知った。

心に惑いはもはや無かった。

自分でも驚くほどに。

心はずかに脈打った。

いまゝでゝはじめて。

そのイノチを。

これまでではじめてこのイノチを得ている気がした。

顯らかに。

わたしは。

青い空。

明らかな光の下にも。

顯らかに。

わたしは。

雲った空。

鈍い白い光に。

顯らかに。

ふる雨の音の。

さらさらと。

それ。

ざわざわと。

充満する。

周囲を圍むそのひびきの中でさえも。

ぞわぞわと。

かく聞き、斗璃麻沙及び斗璃伎夜俱なりて胎生ノ生を現ジたるは比登らが古與美貳仟ノ
貳年なりき月は三月三日或云如月そノ雪の降る日なりき故レ斗宇伎夜宇ノ美夜許雪にう
づまりき且つは雪の白の色に染まりき是レ此ノ頃の由伎ノ色白かりけるが故なりキかく
て三月その十二日に多香枳失せにき所以者何病院に多麻美又双子見舞ヒたる後そノ病院
屋上より飛び降りたるが故なりキ遺書等ナシ故レ布美迦ひとり娑娑彌氣囉坎

窓のむこうに翳を見た

違うだろ？

ベッドの上にわたしを見つめ

在った。そんな表情が

躬をよじってわたしの手から

その眼には。違うだろ？

のばす指にそっととろうとする

開いた口に

林檎を

そんな表情

珠美の背後

そうに呟いたのだろう

逆光に

違うだろ？

昼下がり。晴れる

開いた口は。男が落ちる

空。逆光に

光の中に

見た

窓の向こうに

落ちて行く人の影を

光の中に

まるで目の前に

驚愕を晒して。ただひとり

へたくそに

自分勝手に啞然と

あまりに出鱈目に

かれはひとりで落ちていく

杜撰な嘘をつきあった

驚愕をさらして
そのこどもの戯れ事じみて
わたしをみながら
開けた口
珠美は笑んだ
開けた双眇
言葉もなくて
その影を見て
かくて布美迦
珠美は笑んだ
爾に都儂耶氣良玖
すでに叫んでいた。
わたしは頭の中で——なにを？
聲は。
叫び聲は。
何を？——死んだ！
と。
高樹が死んだ。
古布高樹がいまゝさに。
死んだ。
いま此の時に
彼は死んだ。
と。
沈黙したまゝ。
立ち上がりもせずに。
わたしは自分の絶叫をだけ聞いた。
イノチ。
すさまじい動物的なまでの。
イノチ。
赤裸々な獣。
野生の。
かれら小さな——あるいは巨大な…野放しのかれら。
獣たち。
ぎらぎらと。
ただすさまじい狡猾さが。
くらくらと。
ただなすすべもないその暴力が。
わたしは黙る。
叫んだ聲を何重にも聞きつづけながら。
林檎を剥いた。

次のリンゴを。
——もういゝよ。
さゝやいた。
微笑んだままの珠美は。
——たべられないよ。
置く。わたしの指先は
林檎を剥いて。
——お母さん、食べる？
お皿一杯に。
キラキラの。
瑞々しくて。
すこしの痛み。
たぶん噛み千切れば。
歯茎に。
甘やかな。
甘い茶色の熟れ。
肌の傷痕。
ざわめきが足の下から伝う気がした。
すでにざわめき騒いでいたから。
事実として。
外の廊下は。
病室の中さえ。
病室の隅さえ。
天井の裏さえ。
スラグの下さえ。
指にふれる空気さえも。
どこもかしこも。
人々は騒ぐ。——どうしたの？
珠美がさゝやく聲を聞いた。
——どうしたの？
わたしは林檎を剥き続けた。
珠美を決して見ない儘に。
伏せた眼差し。
わたしは見ていた。
狂気した珠美の見開いた目を。
落ちた男よりより凄惨な目。
その凝視。
わたしは見ていた。
狂気した珠美のあけひろげた口。
その口蓋を。

唾液の糸を。
落ちた男より無慚な。
聲もない。
それ。
珠美のいつかの絶叫の音を。
沈黙の中に。——ね？
と。
珠美は云った。
——ね？
いくたびも。
——どうしたの？
——うるさい！
わたしは叫んだ。
小聲で口の中に一度だけ。
だれにも聞き取れない微弱音。
ひとりで叫んだ。

かく聞きゝ多香伎ひとり病院が九階相当なル屋上より落ちて頭蓋骨折れ又頸ノ骨折れ又背骨等骨格損壞シ又内臓等破裂シかくて多迦伎は失せにキ是れ即死なりキ病院裏の關係者用ナル駐車場の狭きアスファルトに肉ト血玉散らせ穢シたりキ故レ伎與麻沙爾に多麻美にそノ夫失せたることを告げたりき是レ入院シたる病室にテ此れ夕方の五時すデに死体処理等畢りたる後なりき傍ラ看護師ふタリ監視せり醫師伎余麻娑ガ告知シたるに多麻美狂亂スルヲ按ジたるが故なりキ布美迦ハ外の通路に休ミき廊下の窓ハ東向きなりき故レ日没はなかりきたダ空は青く青ク昏ミき昏みテ青く黒くなりゆきゝ色は冴えはてもなくに澄みてかくて伎與麻沙ひとり娑娑彌氣囉玖

いゝ？
なに？
いゝ？…いま
なにが？
だいじょうぶかな？
ね？
ちょっと…
なに？
はなしが…いゝ？
なに？
だいじょうぶ？
死んだんでしょ
なに？
ちがう？
だれ？
死んだんじゃない？

だれが…
　　高くん。自殺？
なんで…
　　違う？
なんで、だれから？
　　ちがうの？
そしてわたしは聞いた。
目を閉じて。
まるでこれから誰かと——高樹と？
彼女の夫と？
口づけするかに思えたかすかな羞じらい。
ほのかに媚びて。
あきらかに歓喜して。
その。
やわらかくとじた瞼の睫毛は。
口はかたちにだけ叫んでいた。
大声で。
聲もなく。
聲も無い口が絶叫のかたちをだけ作り、さらす。
そのかたちだけを。
作り、ふたたび。
そして。
聲もないまゝ。
彼女の叫んだ濁音のながい悲鳴を私は聞いた。
聲もないまゝ。
顯らかに耳に。
同じきに
　　耳に聞いていた。
多麻美ひとり娑婆彌氣囉玖
見た
　　落ちる蝶
すでに
　　はゞたくたびに空のうえの方に
夢に
　　落ちていく
見た
　　重力をなど
すでに
　　無視をして
シ

おちていく
その人の
はゞたくたびに
かれのシは
その鱗粉は
彼はシに
きらきらと
わたしはイきた
蝶
イきのこり
眞っ白な
シにもシないで
はゞたくまゝに
見た
落ちていく
ゆめに
どこまでも
すでに
そらの高みに
見た
おちていく
そのひとの
蝶
彼のシは
まっしろい
なんどもすでに
その羽ねは
ほんのいっしゅん
ただひたすらに
せつ那のゆめに
きらゝいで
くりかえしみた
そのしろい羽ねは
その人の
かくて多麻美
ざん酷なシは
同ジきに娑娑彌氣囉玖
イイシれぬシは
シロイゆき
ゆきいろはシロ

シんでいくシは
シろくろに
イまはゆきの
ゆきのいろさえ
シろくしましま
シにたえ
しましまにシロイ
イわをかむ
シんで
かんだはゝシろ
シろいろのちのいろ
イイシれず
イのちシらずに
イイシれず
シんだイのちは
ちまみれの
シ
イイシれず
かなシイト？
それでもなおも
かなシイト？
かなシみはイま
かくテ多麻美
かなシみはイま
爾に都舞耶氣良玖
聞いていた。
父を目の前に。
一度たりとも見止めなかった。
一度だってその人を父とは認めなかった。
その父の。
彼の目の前に。
躬づからの目を閉じていた事実にも気づかずに——なぜ？
見ていたから。
その時でさえも。
その夢を。
落ちる蝶の白。
さかさまに地表から降る。
上り落ちる雪。
白く。
白にただ白く染まって。

聞いていた。
歯茎のすべて。
歯の表面から。
歯噛みする。
そのきしむ音。
歯齧みした。
その歯茎に味。
血の。
鐵錆びた。
なまなましいだけ。
くさいだけ。
その。
血。
それ。
歯茎がながした血の味を舐める。
粘膜は。
歯の白いエナメル質が噴出させた。
血。
くれなゐの。
どす黒い。
赤すぎて。
黒。
その味を。
粘膜が舐めて。

かくに聞き、伎與麻紗爾に娘ヲ思はずに懐かムとすルに多麻美いきなりに目ヲ開キテその胸を打ちきかくて拒絶し伎與麻紗未だ驚き得もせざるを且つは、伎與麻紗未ダ我に返り得ざるを且つは、伎與麻紗未だ恠みだに浮かじ得ざるを且つは伎與麻紗未ダ慄き得もせざるを且つは、伎與麻紗未だ憤慨だにシ得せざるヲ且つは、伎與麻紗未だ哀しみだにシ得ざるヲ多麻美ひとり臆而ひらきたる麻那古に伎與麻紗を見て觀をハリて視テ瞰たるまゝにつぶやけらく——だれ？ ト且つは多麻美つぶやけらく——ね？ と且つハ多麻美つぶやけらく——あなた…ね？ ト且つハ多麻美つぶやけらく——誰？ と且つは多麻美つぶやけらく——あんただれよつぶやく多麻美が唇そノ肉ノ薄きヲ見て伎與麻紗ひとり觀をはりて且つは視て伎與麻紗ひとり觀をハリもせざるにオもはずに伎與麻紗が眉は泣けるかたちに震ルえんとシ且つは伎與麻紗が目は微笑まんトし且つは、伎與麻紗が唇はわなゝかムとシ且つは、伎與麻紗が鼻は息吸ヒこまんとシひらかんとシ大きにひろがらムとシなにごともなシ得ずそれら終に狀チなしヲはうざるに耳ハ聞き、伎與麻紗が耳ハ多麻美が聲を聞き、是レ爾に多麻美云さく——あんただれなの？ と思はずにつぶやきたる躬ヅからが聲を多麻美が耳ハ聞き、——あんただれなの？ トかくて時に、伎與麻紗立ちあがりテ云さく——しっかり…

と

しろ。しっかり…して

と

しっかり…まだ…しっかり…だいじょうぶ

と

きっと…しろ。しっかり…いま…

と

な？

と

しっかり…な？…しろ。だいじょうぶ…な

とかくテ伎與麻紗我に返りテ想ひけらく——俺は何を？

と

いま何を？

と

俺はなにを？

と

ひとりでなにを？

と爾に、伎與麻紗ひとり我が絶望シたる心地シ我が絶望シタル思ひに咬まれたル心地シ何事をか躬ヅからが心に思フかも知ラぬママにも思はずにひとり走り出でたれば集中醫療室を詣でかノ異形の雙兒を覗き見たりき爾に雙兒ノ一を、伎與麻紗名ヅけて曰く斗璃麻沙と故レ雙兒の一を、伎與麻紗名付けテ曰く斗璃伎與とかくてかくなり故レ是レ雙兒その名をおのおノに得たる始なりき而シテ斗璃麻沙その異形の肉の内にひとり娑婆彌氣囉玖

見る

雪のふる

夢を

ふるゆきの

みていた

その雲のいろ

ゆめを

色だにも

いまも猶

はく濁の

みた

色はなお

夢を

その海に

あざやかに

海をおおうて

あきらかな夢を

降るゆきに

いる
はい色に
夢を
くらみながらも
とめどなく
きざされた
つきることなく
青みをちらして
き羅らかなまでに
あざやかな
みた
白とくろみと
夢を
そのあおの
みる
すさまじいまでの
ゆめを見ていた
たん調な
故レ斗璃伎與ひとり娑娑彌氣囉玖
みる
いろの中にも
夢を
ゆきは降る
見ていた
海はなみ立ち
ゆめを
さざなみの
いまも猶
その音もおく
見た
聞こえずに
夢を
ゆきはふる
あざやかに
青くらいひかり
あきらかなゆめを
灰いろの
見る
ひたすらなしろ
夢を

なみさえも
とめどなく
しらみ綺ららぎそのあおみ
つきることなく
きらめきもせず
き羅らかなまでに
うみにゆき
見た
ゆきは浪にも
夢を
きえるのか？
みる
雪はなみにも
ゆめを見ていた
かくてひとり
とけて失せしも
爾に

その雪は
多麻美ひとり都儼耶氣良玖
拒絶する気などなかった。
たとえあなたを一度たりとも父と見止めなくとも。
あなたを。
拒絶する？
そんな気など。
纒かにさえもなかった。
傷つける気など。
纒かにさえも。
侮辱した。
むしろわたしは私をこそを。
赤裸々に。
侮辱した。
なぜ？
心につぶてに殴打した。
なぜ？
あざ笑った。
なぜ？
聲もなく。
なぜ？
知っている。
男は死んだ。

知っていた。
彼はすでに。
問いはしない。
なぜと、その死を。
問いはしない。
救われもせず。
ただ失せただけ。
例えば雪の。
その降りた花卉の上二さえも。
音もなく。
溶け消える雪。
それに同じく。
振り返れば。
すでに春の。
その晴れた日に。
降る雪はなく。
問いはしない。
あなたの死をは。
責めはしない。
あなたの死をは。
赦しはしない。
あなたの死をは。
夢の内に。
雪はふるかも。
見さえすれば。
降る雪の。
その夢をさえ。
見さえすれば。

故レ多麻美爾に娑娑彌氣囉玖

雪はふり ひらい目にも
おともなく 雪はふり
とぎれることなく ひらいた眼にも
雪はただ おともなく
ふらふらゆらぎ とぎれもせずに
雪はいま 今はただ
ゆらゆらゆらめき ふらふらと
何を云う？ 雪は今
心は猶も ゆらゆらと
何を今 ひらいた眼にも
雪はふり とぎれることなく

ひらいた目にも とぎれさえせず
おともなく 何を云う？
とぎれることなく 雪は今
今はただ 何を云う？
ふらふらゆらぎ 心は猶も
雪はいま ひらいた眼にも
ゆらゆらゆらめき 音もなく

かくに聞きゝ比登と比登らミなことごとくに斗璃麻沙及び斗璃伎夜ノ早き死壊を確信し
タリき故れ斗璃麻沙及び斗璃伎夜が肉ト肉體躬づカラが死なントス時を息き故レ斗璃麻
沙及び斗璃伎夜爾に三歳になるに病院ヲ移らムとスその時に多麻美腕に斗璃麻沙を懐き
テ娑娑彌氣囉坎

迷う
笑みなさい
思わず
ほゝえみなさい
このまま生かしておくべきなのかと
せめて
命とは
この一瞬に
その尊厳とは
はじめでの
問う心
外気にふれた
その言葉にもならない思いの群れの
六月の
かさなる無数の
奇蹟的な
轟音の中に
雨のない
前例のないイノチを思った
雲ったその日
だれもかれも
匂えさえすれば
いまだかつて
鼻はかぐ。その
だれも見なかった
紫陽花の花
風景の中にそして
その馨りにさえも
ひとりで孤立した

かくて多麻美爾に都舞耶氣良玖

在った。

なぜ？

恍惚が。

不可解な迄の。

稀に生まれた。

選ばれて在る。

その限りもない固有のイノチを。

今いきてあるその屈辱じみたそれ。

たゞ恍惚が。

笑う。

まりにも不愉快な恍惚。

赤裸々で。

絶望的なまでに。

自分勝手な。

汚らしい。

わたしの恍惚。

思う。

わたしは素直に愛しただろうか？

一度でも。

この子たち。

腕にだく。

異形のイノチを。

一度でも？

その宿命を。

一瞬でも？

むさぶる異形。

思う。

愛しむべき。

この。

だれにも素直に愛されなかった。

この命。

無残の子供たち。

彼等を一度は？

或は思う。

愛されるべきイノチなどあったのだろうか？

一度でも。

愛し得るイノチなどあったのだろうか？

一瞬でも。

愛されたイノチなどあったのだろうか？

せめても
故レ布美迦腕に斗璃伎夜を懐けば娑娑彌氣囉玖
匂い立て
すでもう
せめても雨の
わたしの心は歎かなかった
ふり已んだばかり
すでもう
その雨の
異形の子たち
すでに失せた
死にかけのイノチを心は赦し
匂いの名残り
わたしをさえも
名残りくらいは
すでに心は
せめても匂え
かくて布美迦
すべて綺麗に
爾に
忘れられる前に
都儂耶氣良玖爾
生きてあれと。
思った。
それでもなおも。
生まれたものたち。
いかにあなたが穢らわしくとも。
いかにあなたがいびつであろうと。
むしろ。
死んだ方が樂であっても。
死にさえすれば色も馨もない静寂に。
にもかかわらずに。
思った。
生きてあれと。
それでもなおも。
赤裸々なおそろしいばかりのただの残酷。
その剥き出しの。
肯定を齧む。
齒が。
Yes とつぶやき。

無慈悲なまでに。

その他人のイノチに。

かく聞き、布美迦気付けバ已にして多麻美狂ひきいつよりぞ多麻美狂フやその時をハ知らズかくて布美迦気付けばそれ已にして多麻美狂ひき故レ食りき狂ヘル多麻美部屋に飾れるその花さまざまナル花を多麻美ひとり食りキ口に咀嚼したりき齒に嘔吐したりき唇に下したりき腹に食りたるはそれ百合の花なりき食るハそれハイビスカスなりき食るハそれ霞見草なりき食るハそれ寶泉花なりき食るハそれ極楽鳥花その色づきたる花卉なりテ食れる多麻美その瞳に虹彩をひらき聲もなく虹彩をひらキ鼻に息シて食り狂ヒき故レ時に呻ク多麻美の傍ら伎與麻沙は時にさゝやきゝ多麻美ノ傍ら伎與麻沙は時に喚きゝ多麻美ノ傍ら伎與麻沙ハ時に叫きゝ多麻美の傍ら伎與麻沙ハ時に黙止シき多麻美の傍ら伎與麻沙ハ布美迦と相ヒ語らひテ娑娑彌氣囉玖

どうする？

なにを？

どう…

なにを？

鳥雅と…

酉淨？

このふたり…

ね？

どうする？ このまゝ

ね？

だって、このこたち…

まって

このまゝ

まって

なにを？

もうすこし

なにを

ね？

わからない

なにが？

どうする？

なに？

どうすれば？

…ね、

かくて伎余摩沙ひとり爾に都舞耶氣良玖

掩う肉。

膨張した。

喰いつくように。

唇を。

鼻を。
食事はチューブで流し込む。
呼吸の騒音。
こすれ合う皮膚。
化膿した倦み。
ガーゼの黄變。
匂う馨り。
臭気？
その皮膚からの。
嘔吐したへどにお香の香りを撫でつけたような。
つぶれかけた眼。
瞼の肥大。
温度の無い肉。
皮膚に包まれた塊り。
曲がった背骨。
レントゲン写真にあばらの奇形。
おしつぶされて体の内部に流された内臓。
太ももを迄も掩う肉片。
それ。
腫瘍。
小便は切開した肉の開口部で。
時には心臓の音を聞いた気がした。
耳に聞こえない筈のそれを。
耳に。
肛門は常に閉じることなく曝す。
垂れ流された体液の色。
その色は曝す。
体調を。
今日は元気？
熱は 38 度。
いつも。
発熱する。
思う。
もしも自然に生きるのならば。
葉に這う蟲のように。
莖にへばりつくちいさな丸蟲のように。
野の獸のように。
梢の鳥のように。
野良猫のようにも。
彼等のように生きるならすでに。

思う。
ならばなぜ？
なぜその命は生きてあるのか。
今それははたして生きていたのか？
生きあるのか？
目舞う。
私は。
イノチを前に。
それは何か。
わたしは何をしていたのか。
わたしたちは。
だからわたしは目舞う。
何も知らない。
すでにして。
自分の名さえ意識しない。
すでにして。
自分がだれかも意識しない。
多麻美は壁に背を靠れた。
日差し。
斜めに差しこむ。
窓越しの。
光。
午前の明るい光の中に。
斜めの火照り。
肌の白濁。
青む翳り。
喰った。
多麻美はわたしの目の前で。
それ。
だから喰い切られる。
歯と歯茎に。
今日の花。
音のない咀嚼。
六月の紫陽花。
蹴り転がされた花瓶の中の。
床をぬらした。
板張りの。
水が煌めく。
零れた水の。
踏み散らされた水の足跡。

かク聞きゝ多麻美退院直後よりその古古呂變様させたりき故レ是レを狂人と名づく故レ
錠剤嚙ミき又久癡毗琉ひらいテときにさゝやきかくてその小聲多麻美躬づからにだにも
聞き取られざりき故レ多麻美已にして無言の比登なりき所以者何多麻美が耳さゝやき聲
の數多ノ群レなすに占領さしたる故なりき故レさまさまに連ナルさゝやきに自分の喉の
聲なき聲をも幾重にかサねて厥レらさゝやきの又はつぶやきノ又はひそめたる又はゆら
ラギたる聲の群レらガ響きに埋もれたレば多麻美すでにシテ轟音の比登なりきかくて唇
ノふくむ花をふくみて喰らひかくて齒の齧む花ヲ嚙ミテ喰らひかくて花に塗れて花汁に
まミれて喰らへバ麻那古は見き躬づからを見たルその伎與麻姿が兩つの麻那古又波那ノ
孔又久癡の久癡毗琉を且ツは麻那古は見き躬づからを見たルその布美迦が兩つの麻那古
又波那の孔又久癡の久癡毗琉ヲ故レ多麻美が久癡毗琉花汁に濡れテひぢたるまゝに且ツ
は齒花汁に濡れて唾液に濡れてひぢたるまゝに多麻美こゝろに娑娑彌氣囉玖波

きくがいゝ

そのままゝで

わたしがむしろ

目を醒ましたまゝ

きくがいゝ

あくまでも

わたしのみゝこそ

覺め切ったまゝ

騒音のむれ

それら

聞きとれない

夢のむれ

それら

さまさまな

音響の

夢のカタチたち

むれかさなつた

色をなす

音と音のむれ

夢のカタチたち

ひびきあい

わたしは見ていた

塊りをさらす

なぜ？

きくがいゝ

見えたから

わたしは騒音

なぜ？

きくがいゝ

閉じた目にさえ
わたしのみゝこそ
見えたから
笑い聲
なぜ？
さゝやき聲と
まばたきのその
だれかのたてた独り散ちの
一瞬にさえも
無限の音たち
夢を見た
体内の
わたしはなんども
体外の聲なすひゞき
いくつもの
窓のひかり
かさなりあった
ひかりの聲なすひゞき
夢を見ていた
きくがいゝ
その夢は
無言のまゝで？
かくて多麻美
咀嚼の音響
爾にひとり
きくがいゝ
都舞耶氣良玖爾
崩れ落ちる。
轟音と俱に。
それ。
何が？
崩れ落ちるた。
なにが？
轟音と俱に。
なぜ？
空が。
青の空。
同じく崩れ落ちていた。
白濁の。
曇る雲の色。

鈍い雲母の黒ずみ。
崩れ落ちたのだ。
何が？
雨の日の鬱悒しい色。
それらかたちある色。
轟音のうちに。
墜ちたのだ。
せめても花を。
だから投げつければいい。
せめても花を。
それ。空らの残骸。
紅の？
花。
真っ白い？
花。
白に紫。
花。
紫の縁取り。
花。
或はむしろ黄點の点在。
花。
寄生されたにもた青の点在。
花。
白地の花ににじんだオレンジ。
花たちをせめて。
その色をせめて道づれにして。
香りこそ。
墜ちた。
見い出した。
あざやかな眼差し。
わたしの兩眼に。
片時も。
目隠しされてあるときも。
あなたに。
兩手に閉じられてさえも。
見い出していた。
わたしの兩眼は。
それは空を。
崩れ落るその空の向こうにふたゝびの空。
あたらしい。

空。
崩れ墜ちた。
轟音とともに。
せめても花を。
崩れ落ちた。
そのあたらしい空も。
幾度も。
崩れ墜ち續けた。
だから轟音を。
なにが？
繰り返す轟音。
だから聴く。…耳は。
なにを？
ひびきつづけた。
轟音は。
なにも崩れなどしなかった。
赤裸々に。
その鮮明な崩壊。
なにも崩れ落ちなどしなかった。
ただ赤裸々に。
響き合う。
轟音はとどろく。

かくて布美迦花喰フ多麻美を部屋にひとり閉じ込めたる儘庭に樹木ノ翳りに憩ヒきかく
テ返り見背後ナル彼伎與麻沙が麻那古ヲ見上げテ白さく——生きてる？ と故レ伎與麻沙
答へらく——たぶん俺たちはト故レ布美迦白さく——わたしいまもと故レ伎與麻沙答へ
らく——もうすでに、むしろと故レ布美迦白さく——じゃなくてむしろト故レ伎與麻沙
答へらく——自分勝手になってわけじゃなくてと故レ布美迦白さく——生きてた？ わた
したちと故レ伎與麻沙答へらく誰かの爲に…だれの？ と故レ布美迦白さく——いまもす
でにと故レ伎與麻沙答へらく誰かの…ほかのだれの…おれたちふくめたみんなの爲に
と故レ布美迦白さく——今この時にもと故レ伎與麻沙答へらく決断すべきだったト故
レ布美迦白さく——生きてるの？ と故レ伎與麻沙答へらく殺しちゃおうあれ…と故レ布
美迦白さく——わたしたちみんなと故レ伎與麻沙答へらくあのこたちも、あのこも、み
んな、おれたちもト故レ布美迦白さく——あなたもわたしもと故レ伎與麻沙答へらく違
う？ と故レ布美迦白さく——生きてるの？ と故レ伎與麻沙答へらくもうすでにと故レ
布美迦白さく——いま？ と故レ伎與麻沙答へらく俺たちはとかくて爾に俱なりテ娑婆彌
氣囉玖

ぼくらは今
死んでいた
このときにまさに
わたしたちはすでに

すべてを解決すべきだった
死んでいた
ぼくたちはもう
生まれる前から
昨日にさえも
その前から
すべてを解決しているべきだった
死んでいた
逃げるのでも
わたしたちはすでに
放棄するでも無くて
いつでも常に
ぼくらはひとつの解決を
見ひらいた眼差し
取り返しようもなく
視ている風景の
故に
すべて
再発の可能性もなにもない
すべてはたぶん
その
死人たちが見た
あざやかすぎる
瞬時の風景
ひとつの解決
その遠い記憶
かくて布美迦
いまゝさに
爾に都舞耶氣良玖
聲を聞いた。
うめく聲たち。
呻いたわけでもない。
苦しんだ譯でもない。
知性などないから。
ひとかけらさえも。
イノチの尊厳と？
うめく聲たち。
イノチとは？
何に名づけられた名詞なのか。
畸形にうめく子どもたち。

酉浄という名。
鳥雅という名。
たゞうめく子どもたち。
肉腫にふさがれた唇の脇に。
冷たい肉腫。
もれる息に。
うめく聲たち。
生まれたときから。
呻き続けた。
言語。
あるいはそれが顯らかな言語だった。
彼らに固有の。
だから語りあう。
醒めたところに。
彼らの言語で。
雙兒たち。
いま。
だから彼らの言葉をかたり合いつづけた。

故レ多麻美は見き見開いタその目ノ網膜に見き且つハ多麻美は聞きゝあけ開いたその耳ノ孔に聞きゝ且ツは多麻美は味ハひきその口開いたルその舌そノ表面に味はひき且つは感じき且ツは知りたりき多麻美そノ肌に齒に齒頸に内臓に髮ノ毛又は躰毛にだにモあざやかに知りたりき何ヲ故レ多麻美爾に娑娑彌氣囉玖

匂う
あきらかに
鼻に
わたしはすでに
花の
まばたきさえわすれて
匂う
はっきりと
香の
聲をだけ
匂う
聞いていた
鼻は
ひとりで
匂う
覗き込むように
花を
ふれあうように

匂う
味見するように
それ。花ノ汁
聞いていた
匂い
さゝやきあった
それ。花の花弁
彼らの聲を
匂う
雙兒の聲を
それ。雄蕊
酉淨の
雌蕊の
鳥雅の
匂い
さゝやきあう
それ。花粉の又は
無防備な聲
かくて多麻美
ひそめた蜜の
爾に都舞耶氣良玖
鳥雅は見た。
その時。
酉淨は。
見た。
ひとりで。
夢を。
鳥雅はそのとき。
酉淨はひとり。
夢を見ていた。
彼の夢を。
畸形の軀体を立ち上がらせて。
鳥雅はひとりで立ち上がって。
あざやかな。
そのあまりにもあざやかな。
そして顯らかな夢。
よどみもしない。
不穩ないびつさも。
酉淨はひとり夢の中に。
鳥雅は這った。

ひとりでよろめき。
その二本の足。
また三本の足。
だから酉浄はひとりで。
四本の足。
腫瘍をこすった。
花散る床に。
脈打たせた。
あるいはその五本目の足を。
這うように歩く。
歩くように這い鳥雅を見た。
聴て。
酉浄はひとり這い辿り着けば——どこに？
その目は。
どこに？
見ていた。
すでに。
果てもなかった。
水平線さえ見せない。
だから果てもなかった。
その遠くに盡きた消滅さえも見せない。
だから目舞う無限の海に。
その海を。
あり得ない顯らかな海。
さざめくさゞ浪。
だから見ていた。
その海を。
鳥雅はひとり。
たどりついて。
酉浄はそして言葉さえ。
喉にうめくその言葉さえ忘れた。
鳥雅は見た。
酉浄はひとり海を見て
故レ多麻美爾に娑婆彌氣囉玖
白濁の
匂いたつ
一面の空は
潮の匂いが
真っ白に
あざやかなそれは

海の遠い向こうに誰の
イノチの悪臭
何ものの爲にできえもない
たしかにわたしは
眞白の雪を
悪臭の
降らしていたのだ
悪しき細胞
一面の
穢れとしてこそ
白濁の空は
海の中に
鬱悒しく
初めに目覺めた
たゞひたすらに
遠い昔に
波はさゞめき
望まれもしない
かくて多麻美爾に
ただ汚物として
都御耶氣良玖
言葉を忘れた。
その烏雅は。
呻きの聲を。
その騒音を。
微弱の音響。
忘れた酉浄がひとりで見出す。
その海の中に。
空とぶ羽衣の淡い翳り。
青む陽炎。
ほのかな紫。
はためくうす黄のさまざまなきらめき。
せめても。
暗示されるとどめたせめてもの紅の兆し。
色のいろいろのその気配。
ゆらゝがす。
くらゝがす。
その女たちは海の岸邊に。
その浪の上に。
ゆらゝぐ浪にわずかの飛沫。

ふらゝぐ波のしずかなしぶき。
飛ぶ。
その上に飛ぶ。
その上を舞う。
聲と共に。
その聲とともに
綺羅らかな笑いの吐息の。
その聲とともに。
それ羽衣を纏う三人の女。
見下ろした砂。
白い沙たち。
それら無数の粒立ちの白の上に。
畸形の烏雅は嘔吐した。
顔れた。
仰向けにもがく。
垂れた糞尿。
こぼれ出したその体液に。
分泌液に。
生き物の汁。
穢れた味と色と臭気に。
海は匂い立つ。
それ躬づからの汐の臭気に。
海は匂い立つ。
イノチの臭気に。
故レ多麻美邇に娑娑彌氣囉玖
はためく
聞いていた
羽衣
畸形の耳も
空の上
とおくに
いちばん低い
遠くにも聞こえて
空のひくみに
耳元に鳴った
遊ぶ女たち
潮騒の音
そのゆびさきにも
盡きもせず
その衣

とどまりもしない
肌の色さえ
その音の響きを
色は玉散る
かくて多麻美
色が玉散る
爾に都舞耶氣良玖
笑った。
羽衣の女。
ひとりの女がほのかに。
笑った。
だから笑った。
羽衣の女。
もうひとりの女が。
かすかに。
笑った。
ついに。
羽衣の女。
残りのひとりの女があざやかに笑えばゆらゝぐ。
大気は。
その笑い聲。
かさなる音響。
もはや音楽のように。
調べのように。
かたちもない音響。
ゆゝらいでゆらぎ。
ひゞく。
ふらゝいでにふらゝと。
女は笑った。
ひとりで。
となりの女は笑った。
ひとりで。
むかいに女は笑った。
だからゆららぐ羽衣。
玉散る色彩。
失禁した鳥雅の上に。
玉散る芳香。
あまやかな。
汚物まみれの鳥雅の上に。
自分の垂れた穢れの上に。

もがく穢れた畸形のイノチの上に。
女の歯ぎしりした音がひゞいた。
きゝきゝきゝき、と。
だからひゞいた。
もうひとりの女の歯ぎしりした音が。
いゝいゝいゝい、と。
だからすでにひゞいていたのだ。
最後の女の歯ぎしりした音は。
ちゝちゝちゝち、と。
ゆららいで。
だからそのときにふたゝび嘔吐の鳥雅を笑う。
だからそのときにふたゝび失禁の鳥雅を笑う。
云った。
——誰？
さゝやくように。
——お前は？
一人の女は。
——だれ？
そのさゝやき聲に。
——お前は？
ひとりの女は。
——だれ？
さゝやいて。だから
——穢いお前は？
女はひとりで野蠻に笑った。
羽衣の女。
狂暴に笑んだ玉散る色彩。
その唇に。

かくて羽衣ノ迦美ら俱なりテ爾に娑娑彌氣囉玖波
穢れた子 穢ヒ子 今も
故 穢れタ子 その子
その穢イ足は 穢み子 穢れタ子
おどれもシなヒ 故 穢い子
その足わ 穢ヒ足ハ 故
なにオシテも おどれもせずニ 穢れた子
舞る上がレもせず どオシテも その子
その腕は なにオシテも 穢い足は
穢い子 おどれモせずニ 穢れた子
だからせメて 舞ゑもせず おどれモせずニ
ひとりデ哥え その腕は その足に

そこでせめて 穢い子の なにをしても
白み沙 その腕は なすべしらに
波に濡れて ひとり 穢ひ足は
濡らされながら せめて歌えひとりで 穢れた子
そこで歌え 歌くらい 舞い上がれもせず
地の表面で せめてもの その穢れた腕わ
汚物に塗れ 白み沙 穢い子
穢ひ喉に 波に濡れひぢ だからせめても
そこで歌え 濡れひぢながらに 舞えもせず
せめてもひとり 地ノ表面に ひとりで歌え
そこぞ譎いな 汚物まじれで 白み沙
穢み子 穢ひ喉に 波に濡れひぢ
そこぞせめても 穢れた子 ひぢて濡れれば
歌をうたえば？ 汚物ノ子 地ノ表面で
哥え耶阿乎波

かくて多麻美

哥え耶與乎波

爾に都舞耶氣良玖爾

だから笑った。

あなたは笑った。

狂える女。

羽衣の。

狂暴な女。

野蠻な女は冷酷な。

浄らかな。

その唇の色。

むごたらしい。

その眼差しの色。

綺羅らしい。

ゆらぐ衣の。

綺羅めきのうちに。

その微風。

だから笑った。

あなたはも笑った。

声を立て。

鳥雅は笑う。

その聲は。

獣の啼いたその聲のように。

嘴の。

だれかに喰われて朽ち果てた。

その嘴を持つ。
死んで腐った鳥のように。
極彩色の鳥の翅。
屍の羽生。
野鳥のようにも。
野生の聲に。
いきものゝあざやかな聲。
その濁音に。
笑った。
鳥雅は。
だからさゝやく。
哥え狂った。
狂った穢い。
穢い生き物。
お前は歌えと。
羽衣の女。
その口たちの言うまゝに。
むしろ聞きもしないで。
女たちの聲など。
聞き取れもしないまゝに。
だからあなたはひとりで歌った。
故レ斗璃麻沙歌へらく
乎乎乎宇波
意宇波意宇於乎
乎乎乎乎宇阿
かくてその海に
波は綺羅めく
その色に
耶阿阿波阿爲阿
夜阿阿意宇意阿
波阿阿阿阿耶
そのしぶきにも
波阿阿夜阿夜波
於乎宇宇惠阿波
波伊爲阿波
そのしづくにさえも
波伊阿
爲阿乎波
爲阿波
波伊宇波

白濁の

爲阿夜阿波

夜乎波

波阿阿惠波

海の波立ち

宇阿波阿波

波耶波

阿宇波耶波

さざ波の

意宇波

波伊波波耶耶波

爲耶波阿波

綺羅ぐ波立ち

爲耶乎乎乎波

波耶波

乎乎乎乎波

白い色

宇波耶

夜阿夜波波耶波

乎宇

わなゝく色に

宇意波

乎宇乎波

宇乎乎

しづきあげるをも

於迦迦迦迦迦迦

乎迦迦迦迦迦

迦迦迦乎

砕けちるをも

意宇

宇宇波意宇

宇宇波

散り舞い散るをも

伽伽伽爲迦爲波

波阿波

玉散る色ら

爲阿阿夜阿夜は

意宇波

その色らだにも

迦迦迦毗耶阿波

意宇
海は波打つ
宇意波
海は波打つ
宇宇波
かくて多麻美ひとり娑娑彌氣囉玖
笑う聲
羽衣の
玉散る聲ら
色ら由羅らぎ
聲は玉散り
故レ陶麻美爾に都儂耶氣良玖
羽衣の女。
天飛ぶ女のひとはさゝやいた。
眞珠を硝子にこすりつけたひゞき。
その聲に。
殺してちゃえ、と。
だから羽衣。
天飛ぶ女のひとりもさゝやいた。
硝子を磬に叩き割るひゞき。
その聲に。
いまゝさに、と。
だから羽衣の女。
天飛ぶ女のひとりさえさゝやいた。
ゆらいだ空気の絹に擦れたひゞき。
その聲に。
壊しちゃえよ、とその聲は。
その聲。
羽衣に玉散る色。
その周囲に。
その聲。
こだますように。
とめどもなく。
ひびきあって。
こだますように。
かさなりあって。
ただとよめきたって。
こだますように。
だから女たちは笑った。
その唇に邪気もなく。

だから女等は遊んだ。
その臉を閉じもしないで。
天を飛んで。
野蠻な口の狂暴な唇。
その色。
夢に見るべき桃の肌。
あわいうす桃。
その齒の笑い。
とよめきの中に。
ぶっ殺してちゃえよ、と。
さゞめきの中に。
いらないよ、と。
ひびく聲に。
この糞、と。
見苦しいやつ、と。
穢いイノチ、と。
イノチの息物、と。
殺しちゃえ、と。
棄てちゃえよ、と。
羽衣の女。
蠻族の女。
狂うために生まれた。
だからひとりでに狂っただけの女たち。
女のひとりの唇が咬みつく。
その息づく腫瘍に。
つぶしちゃえ、と。
喰いちぎる。
女のひとりの陶器の前齒が。
殺しちゃえ、と。
喚き散らす。
女の櫻いろの肌の喉に。
その獸の聲に。
わなゝく聲に。
その唇に。
その齒にさえも。
腫瘍の肉を。
その骨格。
畸形の軟骨。
又皮膚を。
黒ずむ血の珠。

玉散る珠は。
女は咬んだ。
かみ碎く。
咀嚼の音響。
わなゝきながら。
笑い聲だけに。
わなゝきながら。
海はさぎなむ。
ただ静かにも。
羽衣の綺羅。
ひたすらな色。
綺羅らしく。
血は吹きあがった。
喰いちぎる肉に。
海はさぎなむ。
故にさぎなむ。
聞いた。
羽衣の女。
そのひとりのさゝやき。——この瘤は、と。
瘤は、と。——この瘤こそは、と女たちは。
さゝやき聲に——この瘤は、と。
だらかさゝやく。
穢いイノチの幸きみ玉。
この、と。——瘤は、と。この。
穢いイノチの、と——この瘤は。
幸き御珠、と。
だから殺しちゃえ。
喰いちぎり。
壊しちゃえ。
幸き御珠。今。
わたしは貪る。
喰いあらし。
幸きみ玉。
貪り食って。
此のさきみたま。
穢れた命。この幸き御珠を。
こゝに食い荒らす。
さゝやきながら。
喰い千切る女。
羽衣の。

女。
さゝやき笑う。
わらい聲にも飛び散った。
野生の齒ぐきに。
その血は散った。
鳥雅の血。
だから飛び散る。
だから珠散り故レ爾に腫瘍貪り喰はれたる斗璃麻沙貪り荒ラされ喰はれ荒ラされたる
肉躰ヲ曝したりきひとり息遣ひかクテ腫瘍無き躬を始めて外氣に曝シたりき故レその肢
体に白濁ノ空ソの光澤と翳りトを投げて照らしき爾に多麻美ひとり娑娑彌氣囉玖
うつくしい
白い肌
その肉躰は
なまめきわたる
だから匂いたち
そのなめらかな
だからあざやかな
肌の色
芳香を纏う
やわらかな
その肉躰に
筋肉の息吹き
鳥雅はひとり
しなやかな
初めて二本の足に立って
うつくしい
そして振り返た
その人のかたちを
女たちの
哄笑し
羽衣の色のその向こう
女らは口に
それでも海はさゞなんだものを
のゝしり散らして
咆哮を
あざ笑いたてゝ
鳥雅の人の
鳥雅は
その口はその時
ひとりでまばたく

咆哮を
その瞼
鳥雅が叫ぶ
嘲弄の聲
鳥雅の喉が
その飛び交う下に
あきらかに叫び
かくて多麻嫩爾に都儼耶氣良玖
哥え。
女は耳元に云った。
さゝやき聲で。
譌ゑ、と。
酉淨の。
腫瘍に曲がったその耳元に。
歌工、と。
女たちは。
膿みを薫らせたその耳元に。
あたゝかな。
温度のある息。
獸の舌の湿度の兆すその息を吹いて。
女たちは云った。
故レ庵麻美爾に娑娑彌氣囉玖
わたしは見ていた
これはぼく、と
うつくしい
鳥雅はつぶやく
まれなほどにもうつくしい
これがぼく、と
少年のかたちに絶望の
鳥雅は
無間の歎きさえすでに盡きたその眼差しを
腫瘍を喰われた綺羅らしい
さらすひとりの
少年の肢体
鳥雅の足元
だれの爲？
大口を
もはや誰の爲でさえなく
腫瘍の下にひろげようと
鳥雅は

つぶれた眼窩に
だからさゝやく
その瞼
これはぼく、と
瞼の下に
白くわかやぐ
白目を剥いた酉浄の畸形
胸はゆらゝぐ
彼は歌った
息遣う
あえぎながら
ぼくのイノチの
彼は歌った
息遣う度に
背骨をさえも
綺羅らいで
引き攀らせながら
この胸はひとり
かくて多麻微ひとり
海がさゞなむ
爾に
ぼくに息づく
都儂耶氣良玖爾
斗伎那久曾
乎宇波
斗伎那土久曾
夜阿波
海に波
由伎波布璃
乎阿波
由伎波布哩氣琉
浪の上にも
比麻那久曾
意禮阿
比麻毛奈久爾曾
降る雪の
由伎波布璃
乎阿波
由伎波布哩氣琉
雪の降る色

曾能由伎能
宇阿波
曾能由伎能宇波
海の遠くの
登伎那伎我碁登
於宇宇
斗伎那伎我碁登爾
その海の上を
曾能由伎能
阿爲波
比麻那伎我碁登爾
白く染めきり
久麻母於癡須
於阿波
久麻母於癡須耶
染め盡しても
於母比都都會久琉
許能宇美能美地乎
許能宇美能美地乎
海に雪降りかくて随麻美海に雪降り娑娑彌氣囉玖
耳は聞いた
わなゝいて
畸形の耳も
嗤う女たち
このわたしの
羽衣の
わたしの畸形の
色はこすれた
人間の耳も
なりさわぐ
人の耳さえ
晒い聲とも
耳は聞いた
響き合っては
だからこの耳も聞いた
色鳴りその色響き合い
かくて多麻美
その狂暴の
爾に都儼耶氣良玖
言った。

そのときに女の一人が。
殺してちゃえ、と。
女はさゝやきこの幸きみ玉、と。
女はさゝやき鬱悒しい、と。
女はさゝやきこの幸き御珠に、と。
女はさゝやきあふれかえれ、と。
むごたらしい、と。
女はさゝやきお前の至上の歓喜の内にと。
女はさゝやき殺してちゃえ、と。
女はさゝやきこの穢い子、と。
女はさゝやき穢れた子、と。
女はさゝやきその肉を、と。
女はさゝやきその心さえ、と。
女はさゝやきそのイノチごと、と。
女はさゝやきぶっころしてちゃえ、と。
女はさゝやき噎せ返れ、と。
女はさゝやき今無上の時、と。
女はさゝやきこの時に、と。
女はさゝやきひとり噎せ返れ、と。
女はさゝやきあふれかえるそれ。
幸の御珠の、と。
女はさゝやきその過剰にこそ、と。
女はさゝやき讃えられ、と。
女はさゝやき久遠にもその躬讃えられてあれ、と。
女はさゝやきその魂ごと、と。
女はさゝやき穢い子、と。
女はさゝやきこの穢れた子、と。
女はさゝやきその滅びかけの滅びの滅びゆく須臾に、と。
女はさゝやきとこしえに知れ、と。
女はさゝやきとこしえに歌え、と。
女はさゝやきとこしえに見よ、と。
女はさゝやき幸きみ玉の、と。
女はさゝやきその瘤のむれに
故レ庵麻美爾に娑娑彌氣囉玖
開いた（躬づからの）
あふれだす
大口が（その口蓋を）
色ある液体
それ狂暴の（躬づからに）
あふれだす

野蠻の口が（引き裂きながら）
 匂う液体
 齒嚙みと共に（躬づからに）
 ねばついた
 狂暴の口は（のけぞりながら）
 べとついた
 野蠻の口は（躬づからに）
 やわらかな
 開かれて（剥いた白めに）
 嘔吐する口
 女たちは（歓喜の色）
 見開いた眼に
 撒き散らし（赤裸々な）
 開いた眼にさえ
 垂らす。その吐瀉物を（その歓喜の色）
 涙のようにも
 その吐瀉物を（躬づからを）
 女は吐いた
 かくて多麻美
 女は吐いた
 爾に
 笑い騒いで
 都儂耶氣良玖
 かぶる。
 その身に。
 だから塗れた。
 その畸形の躬は。
 酉淨は。
 吐き出されたあらたな腫瘍に。
 その膿みに。
 瀉みの臭気に。
 嘔吐されたあらたな腫瘍に。
 その膿みに。
 瀉みの臭気に。
 つままれた。
 その顔面をも。
 背中をさえをも。
 太ももをさえも。
 爪のさきさえも。
 喉をさえも。

肺腑をさえも。
心臓さえも。
くるまれた。
酉浄は。
背骨にさえにも咬みつかれて。
だから笑った。
女は。
女たちは笑った。
群れなしてその羽衣。
のたうちまわり女たちは嗤った。
その羽衣。
まさに色散りかうまゝはためきあえば。
その色。
羽衣の色。
さわさわと。
女たちの周囲にだけに。
そこらにだけに。
そこらじゅうにまき散らされた。
ざわざわと。
笑う女たちは野蠻に嗤う。
ゆらら。
赤裸々に。
見ていた。
腫瘍だらけの。
わたしの眼はそれ。
腫瘍に喰われた。
見ていた。
その肉のかたまり。
猶も。
腫瘍と瀛みの酉浄は。
見ていた。
猶も。
立てた。
酉浄が。
今も。
その喉に。
もはや。
その喉にだけ、それ。
決してひとの喉の上げ得たものではなかった異物の聲を。
それ。

異形の叫びを。
猶も。
畸形のかたちの叫びの聲を。
小亂聲蚊頭囉岐第一

啞ン癡 anti 汚溜我貳翠夢 organism II

2021・01・04 - 06 黎マ



亂聲

亂聲一

かク聞き、爾に少年ありき蚊頭良岐ノ且ツは迦我ノ且つは古布ノ登喇麻婆と名づく是レかぐはしく匂ひ立ちナまメいて左丹通良布かたち誇るトも那久邇稀にも綺羅らしければ時に比登ノ古與美ノ式仟捌年齢ヒ六ツを數へき故れ斗璃麻婆いまだ比斗ノかたちに息たりき如月咲く花すでに彌生のはじめにも散り畢てれば皐月の空ノ下に匂へる色葉をだにモときじくそ雨の香散れる梅雨ノ六月したたる雫は紫陽花の花ヲし濡らしたる朝ノ明け方に哩麻沙ひとり目覺メたりき厥レ夙夜なり故レ闇の昏さノみありき是レ蚊頭良岐ノ家ノ内なりき厥レ安藝の美夜土麻が樹木ノ茂りの内にありき迦豆羅岐ノ天都遠ガ残したる家なればなり雙兒が父親ナル古布ノ多香伎已に失せたりキ且つハ生ミの母なる古布ノ多麻美既ク狂氣したりき故レ多麻美が母ナル迦我ノ布美伽その夫伎與麻沙ト俱なりて迦豆羅岐ノ家に移り棲みたりき天都遠すでに失せたりテ且つは天都遠が母又は父又ハ祖母又は祖父すでに失せられたるなり故レ家は空に残りき爾に布美迦その伎與麻婆と俱なりて思へらく伊都久志麻に俱に移り棲まムやと何以故そノ島に祇樹古藤記念園ありける故なり何以故に多麻美ひとり狂ひたる故なり何以故そノ雙兒斗利伎與及び斗璃麻婆すでに比斗ノかたち持たズて生まれ墜ちたる故なりき故レ布美迦爾に伎與麻婆ト俱なりて斗利伎與及び斗璃麻婆を美夜土麻に養育したりきかくテさ丹つらふ斗利麻婆ひとり二階なる部屋に躬づからがめ覺めの息を吸うかくて幸きみ玉薰ル斗利伎與畸形の腫瘍又そノ垂れる瀧ミに塗れつぶれ染まりかたちゆがみてそノ玉狂ひ異形の息ヲ肺に刺シこまれたるチューブに吐く醫療機材に圍まれたる斗哩伎與が寢臺の傍らに添ヒたる寢臺に寝りたるを未ダ夙夜の明けモせぬ夜にひとり斗璃麻婆が目覺めたル所以者何厥れ階下ナル物と物らノ立てたルひそやかな音らに目覺めたればなりかくて斗璃麻婆ひとり起キ上がり帷シむともなくに床におりキかくて躬づからの足音ひよめるともなくに廊下ヲ歩き、かくて斗璃麻婆なにヲも思わなくに階段を降りき昏がりに木造ノ床時に軋みたき故レその音斗璃麻婆が耳に聞かレキ斗璃伎與は聞かザリき故レそノ御玉幸きみ玉に狂へるが故なりき爾にうつなる斗哩麻婆身ヲ動かしたる纒かにダにも匂ひ立タすそノ肌に纏ふ甘やぎたる蜜ノ芳香をしかすがに躬づからハ知らず故レ翳りに隠れる蟻をのミ驚かす且ツは彌馨りたちしかレども躬づからは氣ヅかず故レ翳りに這ひたる蜥蜴をのミ驚かすかくて居間なる部屋に出たるに雨戸ノすべてを開かしてありき故レ奴婆多麻ノ空に光一点の麻騰伽なる月なナめの淡き輝きに目ヲそばめつツ彼の雙つの麻那古は爾に見たりき何を厥レ祖母ナル布美伽ひとりシて庭に立ちて立ち尽クしたルその後ろ姿ヲなりキ斗璃麻婆が目は爾に見たりき何ヲ厥レ茫然の布美迦さうす黑白の髪だにモ月はも綺羅めかスをナリきかくて斗哩麻婆そノ心にひとり娑婆彌氣囉玖

なゝめに差す
なにを？
傾きはじめた
あなたは、いまそこで
月のひかり
なにを？
まだ白みはじめない色
いまだ
ふりかえりもせず
庭ツ鳥
にもかゝらずに
迦那の聲さえ聞こえもせず
わたしは見ていた
冴えるばかりの
纒かにだにも見えもしないその正面の
静寂の
歳よりはるかに れた女の
ただ澄み渡るだけ
茫然の眼を
あなたはなにを？
ふたつの眼差し
そこであなたは
その恍惚の色を
なにをあなたは？
光る月。たゞ
問いかける気もさえもなく
音なくも淨み
あなたの背後に
かくて斗喇麻婆
ぼくはひとりで
爾に
あなたの爲に微笑んだものを
都儂耶氣良玖
わたしは見ていた。
その目。
ふたつの。
加賀文果の目。
いつかすでにめ覺めきった。
わたしは。
だから眠けもなく見ていた。

しばらくは聲さえかけずに。
その女。
文果を。
匂う髪の毛。
彼女の。
殴打した。
その女。
振り向きざまに。
いきなりこのわたしを。
殴打した。
のゝしりながら。
聞く獣の聲。
その女。
文果はすでに壊れかけた。
彼女ひとりで。
手の施しようもなく。
なすゝべもなく。
その女。
前觸れもなく。
すこしの兆しもなく。
その女。
駆け上がる。
鼻に血を流すわたしを捨て置いて。
その階段を。
音もたてずに。
背を丸めて。
昼の猫のように。
その女。
殺そうとした。
斗璃伎與の呼吸チューブを引き抜き。
斗璃伎與を。
殺そうと。
その意思もなく。
毀そうと。
意識さえもなく
だから叫び聲を聞いた。
わたしの耳も。
伎與麻婆の聲を。
文果の耳も。
炸裂の須臾。

白濁の閃光。
その炸裂の須臾。
我に返った。
未だ自分のしようとした事に、それが何だったかにも気づきもせずに。
文果は。
それが何だったかをも知り得もせずに。
わたしも。
ただ我に返った茫然に殴打した。
浄雅は。
殴打した。
女がいつかわたしを殴打したそれよりも激しく。
いつの間にか忍び込んでいた男。
加賀浄雅は。
男の拳が殴打した。
いまだ女だったそのいまだ人だった文果の軀を。
喚き散らして。
加賀浄雅は。
男こそはむしろひとり自分だけ我を忘れて。
埋没したの？
あなた自身のその衝動に。
うずもれ切ったの？
泣き叫びながら。
だからわたしはすでに笑っていた。
浄雅と文果を。
わたしをも含めて。
泣き聲に。
あふれる涙に。
わななく躬に。
わたしはその時にも顯らかに聞いた。
笑うわたしの聲を。
頭の中に。
囁くわたしの聲が。
だから眼差しは見た。
涙もなく。
さわぎたつ。
笑い聲もなく。
冴えた意識。
澄んだ心に。
黒髪の掩いかけた目。
文果のかすかにひらいたひとつの口。

その茫然を。
光綺羅きら。
虚ろに朧な。
月綺羅ら。
その茫然を。
綺羅ら。

かくて斗璃麻婆ひとりシて見き何を見たルや失意の伎與麻婆捨テ置きたる布美伽やがテ山道をノぼるその後ろ姿ヲかくて斗璃麻婆ひとりシて後を追ひき布美迦ノ布良都久古登モなき歩ミの慥かヲ故レ不美迦むしろ踊るようにひとり歩ミ行く又ハ舞へる様にひとり歩ミ行く故レ爾にひとり斗璃麻婆足音ひソめるともナくに且ツは足音忍ばセルともなクにしかすがに布美伽が耳は聞かずそノ足音を布美伽が心ハ知らずそノあえぐ喉ノ息を故れ誰も見ざりキ布美迦の背に随フ綺羅らノ斗璃麻婆の稀なる姿アるを故レ布美伽ひとりシて山を登りき山ヲ上りて山の頂きノその六角堂に出デたるときにようやくに空斬れタリき是れ東に本州の陸ノ翳りなす上に朝の光ノ上りゆければなりかくて明ケの紅蓮ノ色のきざすを見テまばたけバ爾に布美伽ひとりシて娑婆彌氣囉玖

わなゝくのだ
最後だよ
すでに光は
これでもう
まなざしの中に
最後だよ
朝の光は
お前がわたしを照らすのは
きらゝぐのだ
纒かの音さえ
すでに光は
吐息の音さえもなく
まなざしの中に
いつしか焼く
慥かに
肌の白い
いまだにそこに
眞白の肌を
わずかな光の裂けめにすぎない
黒く染める
やがて青む色なす色をさえ
その光り
顯らかにはしない
強烈な
それでも既に

光がわたしを
さわぎたつのだった
照らそうとするのは
その暁
最後だよ
うまれたばかりの
これでもう
純粋な光
最後だよ
かくて布美伽
息吹きはじめた
爾に
その光りの最後
都儼耶氣良玖
死のうと？
まさか。
死のうと？
誰が？
わたしは見ていた。
わたしの腕は持ち上がる。
わたしの入れた力に素直に。
抵抗もなく。
抗いもなく。
赤裸々に。
挙げられた腕に。
その掌のつかんだ刃。
死のうと？
まさか。
死のうと？
誰が？
わたしは見ていた。
それ。
包丁が。
大ぶりの光。
肉を断つ。
つめたい。
刃の光。
痛みだけが焼けた。
死のうと？
まさか。

死のうと？
誰が？
わたしは見ていた。
厥れは煞す爲。
光も傷みも。
あきらかに誰かを。
その肉を斷つ。
皮を抉る。
骨をも切り裂く爲に。
その光はも。
その傷みはも。
吹き出す血。
血しぶきをちらす爲に。
わたしは見ていた。
包丁は。
迷うことなく突き刺すそれらの須臾。
その苦痛。
肉躰はも。
傷みにのみ突き刺されたそれ。
肉躰はも。
傷みのみを生きていたそれ。
瑞みずしい生きものはもうだいなしにされた。
手の施しようもなく。
もう取り返しさえつかないほどに。
瑞みずしい生きものはすでにだいなしにされた。
突き刺されていく。
その首は。
何度目かにも。
それ。
胎は。
何度目かにも。
それ。
胸は。
何度目かにも。
それ。
思い誤った不意の肩越し。
血まみれに。
吹き出す血の色。
ハイビスカス飛び散れ。
死のうと？

まさか。
死のうと？
誰が？
わたしは見ていた。
灼熱の温度。
頭の中に。
灼熱の息吹き。
まなざしの中に。
熱の焰。
熱狂の。
それ。
焰がわなゝいて目の前に。
網膜を嘗めた。
焰の指が。
網膜を咬んだ。
死のうと？
まさか。
死のうと？
誰が？
わたしがまさに。
知った。
まさにそのときに。
知った。
わたしは慥かに突き刺していた。
私の肉に。
突き刺してしかし切り刻むそんな力などない腕の痙攣。
だから他人の腕が。
もはやその他人の物にすぎない腕が。
わたしだけを刺す。
まさに気付く。
まさに感じた。
全身に。
だからまさに感じていたのは苦痛。
肉を壊し骨に罅なすその刃の綺羅に。
わたしの神経だけが苦痛にあえぐ。
わたしの神経だけが苦痛にあえぐ。
だから。
わたしはまさに痛みそのもの。
聲もなく沈黙のままに息遣いわたしは猶も叫んでいた。
赤裸々な絶叫。

聲はどこに？
ハイビスカスが食った。
脳のすべてが苦痛に燃えた。
焼き切りもせず。
鮮明にすべて残したまゝに。
千切れた肉さえ。
脳のすべてが苦痛に焼けた。
だからあざやかなのだ。
明けの光は。
たゞあざやかなのだ。
苦痛のわなゝき。
瞬いた。
二つの眼差しはも。
瞬き続けた。
瞼はだから他人のもののようにも。
裏切った。
肉躰はすでに。
精神をさえ。
わたしの心。
精神をさえ。
故に。
死のうと？
まさか。
死のうと？
誰が？
まさにわたしは。
焦燥があった。
心にすでに。
赤裸々な焦燥の焰。
速やかに、と。
いま、と。
わたしはわたしを速やかに、と。
ただちにすぐに殺してあげるそのために、と。
いま、と。
いま！ とだから刃を右の眼窩に差し込む。
痙攣の腕はも。
顔面のいたる所を傷つけながら。
小さな眼窩に刃を差し込む。
武骨な腕はも。
もはや他人の武骨さにわなゝきながら。

ひとり痛みわなゝき。
ひとりでにかなぐりながら。
かきむしれ。
指は。
イノチを筆れ。

故レ躬ツからそノ躬を傷附かす布美伽が狂態そノ不器用なる上半身ノ不具合さらす苦闘ヲ見たル斗璃摩娑ハひとり息ヲ飲むとも我を忘れるとモなくテたダ捨て置かれテ笑みキそれ此の滑稽を死なントシ死にきれズのたうツ此の肉の此のひたすらな戯れ事じミタル滑稽をこそ故レ斗璃摩娑は笑ムで邪氣も無く立ちたるまマ倒れもせずテわなナき引き攀ル血まみれの体軀の向こうに朝ノ日差しはも紅蓮の色ヲ成し大氣雨の季節に霧れる雫の舞ヒ舞フ儘に色はかげろフ靄がかる大氣がうちに朝日ハ陽炎そノ色ノ鮮烈ヲし想はずに見蕩ル斗璃摩娑その唇は故レ娑娑彌氣囉玖

夜は今
感じていた
燃え上がる保牟羅
背中はひそかに
夜は今
背後にかがやく
舐めあがる保牟羅
傾く月は
明けの迦狛呂比に
ちいさくしかもあざやかに
音もなく
白くしかない
わたしのほかのまなざしもなく
その月は清らかに
だれの爲でもなく夜はいま
その月はさやかに

かくて斗璃摩娑爾に
崩れ散れ夜は
都儼耶氣良玖
倒れふした。
終に。
前のめりに。
突き刺したまゝで。
その包丁を。
その刃を。
顔面から。
不意打ちのように。
わたしは見ていた。

その頰れるかたちを。
文果の肉躰。
もう壊れた？
思わずに見蕩れた。
もう死んだ？
朝日の紅蓮。
もう碎けた？
靄の翳ろうのその光の色にだけ。
わたしは。
見蕩れたまなざし。
わたしの眼にはそれは不意打ちだった。
あざやかな。
だから。
わたしは思わず驚愕した。
ひとりで。
だから。
わたしは思わず笑い聲さえ唇に立てる。
なぜ？
わたしの心さえ壊したから？
文果が？
いつか。
わたしは見ていた。
沈黙のかたちを。
上半身だけ。
微動だにしない。
微動だにもない。
纒かにさえ。
身動きをなくしたその上半身。
のたうちあばれた。
その兩足だけが。
騒ぎつゞけた。
その兩足だけが。
聲もなく。
見る。
わたしの兩眼は。
その不釣り合いを。
他人同士の同居の滑稽。
上半身と下半身の。
手の指はつかんだ。
爪を立てゝ。

土を抉ってそのままに静止。

もう、たゞそのままに。

かくに聞き、阿波禮なる哉無慚なる哉その肉體いまダ死に絶えざりき故レ斗璃摩娑知らズに唇ノみ笑ミたるままいつくしみ阿波禮なる哉無慚なる哉その御靈いまダ苦痛に叫ぶ聲もなきヲ斗璃摩娑厥れ六歳のか細キ腕に無理やりに顔に喰ヒ込みたる包丁ヲ抜けば斗璃麻娑知らズに微笑みたるままに布美伽が頸を刺シきかくて刺シて切りきかくて斬りて吹き出ス死に懸ケの血ノ色を浴ビたりき故レ斗璃摩娑その躬クレなみに綺羅めクかくてぬぐいモせずテ頸をかきキりたれば布美伽が肉やヤあツて數分ノ後にこと切れたりテしかすがに斗璃摩娑肉躰のそれ死にたるをだに気付かざりき所以者何四肢死後ノ筋肉の痙攣さかんに曝シたる故なりき且ツは斗璃麻娑飽かず死にたる肉刺し續けたりシが故なりき故レ娑娑彌氣囉玖

肉を切る

感じる？

あなたの華奢な

わたしの痛みは

手のひらに

すでに死に

握る刃は肉を切る

死に絶えたわたしは

戯れた

感じる？

吹き飛ぶ血にも

滅びて失せたもはや

ねじれる肉の

他人の神経の群れ

その切れ目にさえも

それでもなおも

おさないあなたは幾度もさして

神経の群れは

あなたの手をもて

わなゝいて

わたしを煞す

吐き散らし

つぶれた眼

あえぎえづけた

死に絶えた眼にいのちがあれば

感じる？

仰ぎみればそこ

掻き巻く。わたしを

あかるむ空の

切り裂いた
そのそらの下
あなたは感じた？
ひくい上方
ほゝえみのうちに
まなざしのうえに
わたしは感じた？
やさしく笑んだあなたを見たのだ
朝光る刃にさえも
つぶれたそのめは
戯れた無邪氣
わたしのためにだけ
かくて斗璃摩娑爾に
ほゝえみあなたを
志吡斗ノ聲と
血まみれの眼窩
俱なりて娑娑彌氣囉玖
弔いの？
あざやかに
厥れはしずく
むしろあざやかに
舞うこまやかな
あなただけを見たのだらう
霧雨の
ほろびゆき
色醒めた厥れは
いつかほろびた
厥れはしずく。弔いの？
わたしは。見ただらう
しずく
あなたの目は。あざやかな
こまやかなゆらぎ
死肉の血の色
四方に
うまれたばかりの
四維にも
かくて斗璃摩娑爾に
その屍。瑞瑞しい死の
都儼耶氣良玖
わかやぐ胸に。

いま。
胸に高鳴りを。
いま。
この胸に。
いま。
感じた。
わずかの高鳴り。
止めやらぬ。
いま。
かすかな鼓動さえをも。
いまも。
あたえることなく散り滅びゆく。
その。
此の肉屍阿波禮。

迦頭羅岐ノ天都遠生まレ安藝の美夜島なれば畸形なす雙兒そノ身に恵まれ狂氣したル女
瀬戸内ナル伊都久士麻に住み渡り來たりヌ故レ美夜島なる巖島祇樹古藤記念園に狂女そ
の身を寄せタリき祇樹古藤記念園是レ孤独者ら且つは老人ら且つは苦惱者ラをば圍ひた
る沙羅の雙樹の花さく稀ナル慈愛の園なりき故レそれ沙羅の眞白の花の周囲は常にシテ
収容されたる狂氣ノ人らの叫く聲らに騒ぎ立ちたりき故レ此の日も多麻美叫きの聲散る
沙羅の花ノ風に憩ひたり雙兒生まれたる歳に住み移りたるなり故レ布美伽美夜島の山の
ひとつノ頂きが上に失せにき此ノ日波靜かなりてよく晴れたりキ朝にのみ山の頂きのみ
靄をシ知りタリ爾に登喇摩娑馬乗りしたる屍未だ瘡癩止めざれば布美伽死にたるを未だ
知らざりき斗璃摩娑血にまみれ肉体既に施しようもなく損壞したるに未だイノチ絶えざ
ると思ひつ時に日ハ登り朝焼けの空に登喇摩娑已に飽き果てつ故レ血に且つは腕と胸に
且つは頸筋にも血の色うつさしさらには血にふれたル手にふれたる頬まで血にまみれた
るその儘にひとり山道ヲ下りきかくて山中腹なる迦頭羅岐が家に歸り着き、それ山徑下
る間にひとり島民たる六十過ぎの男に逢ひき彼の人思わずに茫然と登喇摩娑ヲ見て目に
覩るに恠シむまでも心いたらず故レただそこにそノ行くヲ見守り唇言葉をもしらず又登
喇摩娑山徑下る間に島に放されたるそれ鹿の雄に逢ひき角削られルことなく伸びて頭蓋
の上に華やグ鹿口にその啼き聲を一度上げ故レ斗璃摩娑ハ聞き、その啼き聲ヲ故レ鹿は
目に見キ登喇摩娑ノ紅を散らし黒ずますかたち故レ鹿の鼻は匂ヒを嗅ぎ、その香眼の前
の少年の蜜なす馨と一人の女の移したる肉の香をかくてふた、びに短ク鹿は鳴きたりき
故レ斗璃摩娑そノところに娑娑彌氣囉玖

な、めにさした朝の日は
どうした？
青む翳りと綺羅の
さ、やく
白濁
その無言にも。唇は
産毛も

おまえ…
その男
その唇。まるでそれ、おもわず
彼は静かにひん剥いた眼に
独り言散た。そんなふうにも
わたしをひとり
つぶやいて
そこに見ていた
どうしたの？
かくて伎與麻婆
お前…
歸り着きたる斗璃麻婆が爲に
それ、どうしたの？
爾に都舞耶氣良玖
ぼくは見た。
ひとりでに。
なぜ？
ぼくの目はひらいていたから。
驚きもなく。
ぼくは見い出した。
纒かさえの驚きもなく。
なぜ？
網膜の丸ては燃え上がるようにも驚愕し。
見た。
眼差しは色を紅以外に失ったほどに驚き怖れ。
何を？
ぼくは見ていた。
向こうから不意にひらかれた家の戸を。
古い木造。
戸を開けた彼。
鳥雅の血に塗れた姿を見た。
知らない。
その血の意味は。
そして知ってた。
ぼくは。
已に。
その血は鳥雅のながした血ではなかったことを。
だから知っていた。
誰か他人の流した血だったことを。
匂う。

彼が浴びた血は。
なぜ？
匂わす。
その他人の匂いを。
なぜ？
すでに他人ごとのようにしてその。
厥れは鳥雅の肌。
白い腕の肌にも乾かす。
黒ずみかかるその。
鳥雅は匂った。
他人に浴びたその血にひとり。
逆光の中に。
鳥雅は匂う。
わたしの至近に添うようにちかより。
微笑んだのは彼の唇。
眼差しは華奢に。
少女のようにも。
夢を見せた。
かたちのない夢。
躬づからだにも夢をみる。
そんな気配の眼の潤いに。
無垢なるまゝに。
ぼくを見つめた。
瞳は綺羅ら。
鳥雅は匂う。
誰かの血を。
ひとり匂わす。
その蜜の馨りの表面に。
かくて俱なりてふたり娑娑彌氣囉玖
何だよ。…それ…
…ね？
血？
もう死んじゃった？
じゃないの？…血？
…ね？
どこに行ってた？
…もう、おばあちゃん
今…
血だよ。
どこに？

これ…
今まで…
おばあちゃん
いつから？
山の上
誰？
六角堂で
誰にあったの？
死んじゃった？
なに？
もう…
なにがあった？
おばあちゃん
なにを見た？
もう死んだのかな？
なにが起こった？
死んだ
なにをした？
殺された
なに？…それ。
ぼくに
血？…
…ね
それ。
もう死んだかな？
なに？…血？
殺されたかな？
だれの？
おばあちゃん死んだんだよ
かくて伎與麻婆
ひとりで殺された。
爾に登る山道に都舞耶氣良玖
ゆらゝぐ水滴。
こまやかな水。
飛沫散らすほどでもなくて。
ふれて衣服に染みて消え。
いつかすべて濡らしてひぢさす。
ゆらゝぐ水滴。
靄の。
山道を上る。

耳に聞く。
下るひとりの足音。
ちいさく。
足音を聞き片山の保の御爺は山道に。
聴て今更に振り返いきなりに彼は。
ひとりでそこに正氣付いた。
詰まった溝を掘り返しながら保の御爺は。
雨水の溝を掘り返しながら保の御爺は。
その明け方に。
だから駆け込んでさゝやく。
躬づからの喉の渇きも知らずに。
——お前の處の子、あれ
——なに？
——どうしたの？
——だれですか？
——あれ、今、朝に
——どっち？
——あれ、どうしたんなら？
——どっちの？
——なにごとなら？
さらさない。
ぼくたちはふたりして。
目にさえぼくたちの表情を。
さらしはしない。
唇と言葉の気配にだけ。
何の邪気も無く微笑あって。
わたしの足はすでに保の御爺を見捨てゝ行った。
俱に向かったその山道に。
その山道を上る。
靄の水滴。
きらゝとも。
ゆらゝとも。
かがやきさえもしないこまかな。
靄の水滴。
背後に保の御爺は見ていた。
ぼくを。
ぼくの焦燥を？
いそぐ背中を。
息をしのまばせ。
保の御爺は。

目を凝らすともなく。
わたしは已に知っている気がしたのだった。
山道の上。
こどかい丘地の傾斜する平ら。
樹木の茂りの傍らの空き地に。
たゞむいつか誰かが立てた古い六角堂に。
その草を散らした土の上に。
布美香は死んでいるに違いなかった。

かくてひとりシテ登喇摩娑そノ美夜島の迦豆羅岐の家に残さしたれば二階ナル自分の部屋に登喇伎與ヲ詣づ此ノ斗璃伎與異形の胎と背に蛇ノ無數に巻きつくにも似タ幸キ陶麻の腫瘍ト瀧ミとヲ戴く見るにその部屋未だカーテンに塞がれたるくらがりを留ませ爾に斗璃摩娑ひとり目に厭ヒき故れひキあけたる時そノ須臾に部屋の暗きノあざやかなル消滅まばたく間もなく眩ム目を一度閉じかくてヒラき斗璃麻娑ひとり娑娑彌氣囉玖

あふれかえる

吐いた

光り

荒れた息

あふれかえる

肺を必死で掻き巻くような

散り舞い

喉にやすりをかけつゞけるような

漂う塵さえも

だから息遣う

あふれかえる

イノチは息吹く

光り

酉淨の

綺羅きらと

息は纒かに温度も放つ

光り

胎内の温度

きらめきの

湿めり氣と俱にいつかの冬の

光り。音もない

その雪の日にも

そしてすさまじい氾濫

息の白んだ

かくて斗璃摩娑

それを思った

爾に都舞耶氣良玖

確保するのだ。
俺の眼の前で。
かろうじてお前は。
やっとのことで。
そのイノチを。
そのカタチを確保するのだ。
あやうく。
息吹く肺ども。
あやうく。
流す血管。
その血を。
あやうく。
淀んだ血。
極度の糖分と汚穢と脂肪と淀みの過剰と酸素の不足に噎ぶ。
知ってる？
酸素は燃えるんだよ。
知ってる？
だから穢い爆発物だよ。
あやうく。
垂れる糞尿。
出来損ないの。
消化不良の。
搾取不良の。
ただ巻きちぢまる以外に用を足さない。
お前の腸は。
あやうく。
イノチのカタチが息遣った。
あやうく。
息吹きつゞけた。
時には止めてしまいながら。
蘇生処置。
時には皮膚を乾かせ。
滲む血と瀰み。
軟膏を塗る。
その腫瘍。
腫れ上がったそれ。
膨張。
年と共に。
あくなき膨張。
むしろ育ちあがって行くその肥大。

腫瘍と瀰みだけを生長させた。
おそらくは、と。
思う。
お前はその腫瘍を育てるための、と。
思う。
むしろお前とはむしろその腫瘍であって、と。
思う。
たぶん刃物で切り裂いたらね。
すごく臭いよ。
臭い汁。
あやうく。
かろうじてできあがったそのカタチ。
イノチを維持して膨張させる。
あやうく。
お前のイノチが息吹く。
あやうく。
お前のイノチが息を吐き出す。
あやうく。

故レ斗璃伎與爾にその口に比登の喉の聲だにもなくば斗璃麻裘ひとり娑娑彌氣囉玖

燃え上がる目を見た
うまれたことなど
その焰の眼を
いちどさえ
保牟良たつ目を
うまれたことさえない死人たちの
燃え上がる目を
その未来の死人たち
その目の内に
色のない
あなたは見た
陽炎がゆらぐ
見開いたその目
腐った肉の
その目の保牟良は
腐った血に綺羅
ことごとく見た
匂いたち
燃え上がる
玉散らせ
炎なすその眼のうちに

未生の死人たちは
かくて斗璃麻婆
あなたも見ていた
爾に都舞耶氣良玖
やがてぼくたちは滅びるのだった。
躬づからの細胞にさえも裏切られ。
細胞たちはぼくたちは捨て置きひとりで曝す。
その覺醒を。
もはやぼくたちを振り返り見なかった。
その蛇が。
霑う肌のつややぐ蛇が。
そして抜け殻など振り返らないように。
その蝶が。
鱗粉に花の色を散らした美しい夢。
そして抜けた蛹の殻を捨て去るように。
その蠶の。
絹糸を散らすその虫が。
そして眞白の繭だに喰い破るにも似て。
ぼくたちは見た。
滅びの時にぼくたちの立てた巨大な塔のすべてが崩れるのを。
ぼくたちは見た。
放棄された建造物がいつかひとりでに燃え上がるのを。
ぼくたちは見た。
放置された無人の油田。
その發火の莊嚴。
滅びの時に傾く。
ぼくたちの肩は斜めに傾く。
崩れた裂けめに漏れ出したガスの立てた馨り。
滅びの時に傾く。
ぼくたちの肩は斜めに傾く。
腐乱した鐵のひん曲がった折れ目。
何かの残した牙のように。
自然發火のその炎。
煙る焦げた黒。
紅とオレンジ。
たがいに溶けあう馨りある炎。
滅びの時に傾く。
ぼくたちの肩は斜めに傾く。
茂り始める樹木の影に。
コンクリートを食い破る。

破壊の樹木たち。
アスファルトを喰い千切る。
破壊の樹木たち。
ぼくたちの滅びのその時にさえも雪。
その雪は。
その冬の日にも。
わずかに残った北。
纒かに凍った纒かなどこかに。
それでもなおも降り敷いたものを。

亂聲蚊頭囉岐第二

啞ン癡 anti 鳴瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・07 黎マ



亂聲二

かク聞きゝ比登らが古與美ノ貳仟捌年六月かくテ布美香失せたるを伎與眞姿見て目に觀
きにモカカはずにハからずも悲シミだにも浮かばぬ躬づからノその心をシたダ恠シミ
き爾に躬づからにその所以を問ヒて躬ヅからも所以をしらに故レ屍仰向かせれば幾度も
の刃につぶれたる右ノ眼窩に目ヲ背けいまだ開きたル左目を哀レしみ手づから閉じさしか
くて山ノ頂き息ルもノ伎與麻裳ひとりにシて姿姿彌氣囉玖

わからなかった

なにが？

悲しみというものゝ

ふるえもしない

そのあるべきかたちが

こゝろの氣配

その時には

こゝろはそっと

たゞなまあたゝかな思いの氣配が

どこまでも

喜びも

どこへまでにもひろがって

いとおしささえも纒かにもない

遠くにまでも

ひたすらな

そしてわたしはたゞひとり

無慈悲なまでのあたゝかみをだけ

わたしのこゝろをもてあますだけ

心に流しこみ

なにが？

流れ込んで

わからなかった

心を咬んだ

ただ澄んだこゝろ

血を垂らし

その

かくて伎與眞娑

血の味を齧み

爾に都舞耶氣良玖

こうなるべきだったと？

すでに。

こうするべきだったと？

彼女は。

すでにして。

或はその心から愛しい人は。

心に想うそれにさえも愛おしく。

愛しさのたゞ限りない程の。

そうであるべき。

あるいはまさに事実そうだった愛しい人の。

私はふれる。

迷いもなく。

屍に指を。

温度。

感じられたそれ。

或はいまだに猶も暖かく或はすでに冷やみかけた。

厥れは温度。

残されたもの。

死屍の肌に。

ふれた指先は震えもしない。

感じていた。

冷酷だ、と。

あまりにも、と。

わたし自身をを。

いつから？

と。

惑う。

わたしはこれほどまでに？

と。

怯えた。

その冷酷に？

これほどまでに？

と。

わたしはいつかこんなにも？

と。

冷淡に。なぜ？

思った。

その死を自殺と。
なぜ？
わたしはすでに知っていたのか。
その事実に瞬間、その纒かな須臾に。
感じた。
わたしは。
なぜか目舞いを。
地も揺れる目眩い。
だから感じた。
わたし自身を。
その揺れの内に。
ちいさく。
つまようじの大きさに。
気付いた。
その過失に。
臆て地に胡坐をかいたその儘に。
家に携帯電話を忘れたのだった。
だから野ざらしにするのだった。
屍を。
だから立ち去るのだった。
私は。
野ざらしの屍。
焦燥にまみれながら。
ひとりの屍を見捨てたわたしが立ち去る。
鹿にすれ違う。
焦燥にまみれながら。
指を震わせながら来るのだった。
ふたゝび。
焦燥にまみれながら。
わたしは。
警察を呼んだそのあとに。
山道を駆けたその息遣いを自分の耳に聞く。
誰かの吐く息。
わたしの口に。
誰かが執拗に吐き続ける息。
やまない焦燥。
心に。
不意に。
何度目にかにも掻き巻く焦燥。
思っていた。

鹿の群れがついばむと？

思っていた。

鳥の群れらがついばむと？

その懊惱。

心はひとりでひとり焦がれた。

その心に。

わたしは逸らそうとする目をひらこうとするのだ。

ふるえる指に。

かくて伎與摩娑ひとたビ家に歸りつきたるに戸を開き家に入ツてそこにココにいづくにも人の氣配ノなき氣色を感じて我に返り故レ雙兒だに今失せて消えたるかにも思ひきはレ爾に根拠も無きまゝ確信トなりて故レ伎與摩娑心に焦燥ス故レ伎與摩娑心に驚き慄き故レ伎與摩娑ひとり家屋が内を驅ケて捜シき伎與摩娑臺所が戸を開きたり人だれもあらず伎與摩娑一階風呂場をのぞけり人誰もあらず伎與摩娑居間の内ヲ探れり人誰もあらず階段ヲ上れりそノ驅ける足に床ハ軋めり人誰もあらず躬づからノ寢室開けたルに茲に人誰もあらず故レ思わずに躬づから自身の躬だにすでに失せて消えたる心地せり且ツは惑へり且ツは喉に血の味を感じたり故レ伎與摩娑あざやかに喉に吐キ氣を感じたりき所以者何知らず伎與摩娑かくてふらつく足に雙兒に與へたる部屋ノ戸を手ノ縋れバ開きたルそのうちに見イ出したりき斗璃伎與を厥レ寢臺にありき且ツは見イ出したりき斗璃麻娑を厥レ寢臺がかたわらに立つ後ろ姿なりき故レ安堵シかゝる心安堵し畢りモせずて見たるハ置かれたる醫療装置のチューブに繋がれたる斗璃麻娑ノ肌の白と斑らの赤と瀧みノ色なりき且つハ微動だにせぬ斗璃摩娑ななめにさす光り照りたるなりきそノ須臾にそれ不意に口ヲ斗璃摩娑ハひとり不意に口をひとりあけひろげ背を向たるまゝ故レそノ伎與摩娑を目に見もせで大口ヲ開け斗璃摩娑息を吸ヒ込みそノ音を伎與摩娑が耳はあざやかに聞かかくてやゝあつて不意に斗璃摩娑返り見タれば広ゲたる口の儘にも息ヲ止めそして伎與摩娑を見詰メきかくて斗璃摩娑いよいよに更に大口ヲ開けムとしたるに顎は抗イ喉はわななき骨は傷み伎與摩娑の眼ハ彼が悟り得ずいマ斗璃麻娑が何をシたるかを故レ慄きダにも恠しみだにモせずテ斗璃摩娑ハひとり目を剥きゝかくて斗璃摩娑ハひとりその兩手そノ指に喉を搔き窺らんとシいまだその指血ノ附きたるをあらわぬまゝなれば伎與摩娑思へらく——息が？ トかくて伎與摩娑思へらく——息ができないの？ と伎與摩娑思へらく——これほどに大氣がと伎與摩娑思へらく——新鮮な。みずみずしい大氣がこゝにト伎與摩娑思へらく——息が出来るないの？ と伎與摩娑思へらく——息が？ とかくて伎與摩娑ひとり娑娑彌氣囉玖

陸に溺れた

あびた血に

魚のように？

あなたが殺したあの女の血

大氣に溺れた

あびた血に

魚のように？

あなたはいまさら溺れたのだった

充血していく
ここに
その
地表の上で
白目の色
おぼれ死ぬがいゝ
だから息をひそめた
あなたはひとり
なぜ？
いまさらにそこで
ぼくはひとり
溺れ死ぬがいゝ
かれの死に感染するのを恐れて？
なにをも償うことも出来ずに
かくて斗璃摩娑ひとり
息をひそめた
娑娑彌氣囉玖
見ていた
音も無く
わたしは
纒か。…すこしの
視界のすべてを
憐れみも
すでに掩う
感情のかけらも
雪。なぜいまさら
思いの氣配も
雪などめったに降りもしない場所
なにもないまゝ
なぜこんな島に
それでもなおも
雨の六月に
たゞひたすらにも
いちめん以降る。その
それでもなおも
雪はわたしの視界を埋めつくし
沙羅の花。降り掩い、その白い
いちめん以降る。その
沙羅の花。降り覆い、その白い
雪はたゞ悉くを

かくて俱なりて
白く染めつゝ
娑婆彌氣囉玖
おまえはそこで壊れて行く
イノチは一度も失われなかった
たゞひとり
一度さえ
ことばもなく
たゞの一度も
窒息し
イノチは一度も滅びなかった
お前はたゞ
一度さえ
無意味に壊れ
たゞの一度も
俺の目の
だれのイノチも。滅びなど
眼差しのなかに
たゞ夢見られたゞけの
俺が居たこの
架空の恩寵だったにすぎない
空間のなかに
まさに死など
息は止まった
誰かの心の思い描いた
お前の生きた
架空にすぎない永遠に
息が止まった
かくて伎與麻娑爾に
不在の風景
都儼耶氣良玖
のけぞった。
後ろむきに。
のけぞった。
仰向けに。
後頭部から。
跳ねるように。
足先を。
ひとり勝手に床に撥ね墜ちた斗璃摩娑。
その体軀を見ていた。

息もなく。
喉の痙攣。
自分勝手なあり得ない窒息。
彼は死んだに違いなかった。
見た。
斗璃摩娑の痙攣。
引き攀げの斗璃摩娑
斗利麻裘の。
わななき床に立てる爪の。
斗璃麻裘の兩足。
その痙攣。
失禁した。
その匂いをさえまき散らし、だから。
濡れて行く床。
斗璃摩娑は死んだ。
陸の上で干上がった魚？
ひとり顯らかに。
斗璃摩娑の窒息。
引き攀る喉はいきなりのけぞる。
大口の口蓋。
突き出した舌のそれ。
その硬直は。
お前は死んだ。
勝手に死んだ。

葬送にハ美夜島ナル眞言宗寺沙羅樹院の僧侶を呼びて誦經させたり僧侶名を圓位ト曰す
故レ葬式の日の前ノ夕刻爾に沙門圓位哥我ノ伎與麻娑ヲ痛み且つは迦我ノ斗璃麻裘を悲
シミ又迦我ノ布彌哥を悼ミテ迦頭羅岐ノ家を訪ひて白さク——お顔拜見していゝ？
と是レ戸口に立ちて伎與麻裘が引き開ケたる戸の向かうにひロガル屋内のうす暗がりヲ
見きかクテそこに浮かブ伎與麻裘がほのかなル微笑ミの顔を見て觀を畢りたるその時に
ふたり娑娑彌氣囉玖

顔？

拜見していゝ？

顔ですか？

顔。

誰の？

誰？

かくて笑みて笑むまゝにシテ茫然の伎與麻娑ヲ沙門圓位は思いやりて笑ミ

文果さんの…

文果の…

どう？

なにが？
落ちついた？ すこしは…
わたし？
心、落ち着かれたかな？
いや…
無理は無理。慥かに…
なんででしょうね。ぼく
無理は無理それは
いや、落ち着いてるんですよ。じぶんでも…
それは承知よ。わたしも
なんていうか。
充分ね。もう
冷酷に想うくらい…だって
けれどもね
ほら
なに？
あいつは死んだ…ある意味
行かれたな
こんなこと、云っちゃいけないんですけど
綺麗な處にな
しかも身内が
飛んで行かれたな
楽になってね。…ひとりで
残酷な
でもいい。女だから…いや
最期ちょっとな
これって今時差別的って？
ちょっと残酷、な
でも…
ともあれども、よ
楽になれたなら楽になれば…俺
ま
僕はね？ けれども
綺麗な處
だめでしょ？ 僕迄…
蓮の花の上にな
楽になれないですよ。まだ
なんで？
いるからね。まだ。俺は…
そうな

あの子ら

娘さんもな

雙兒も…

あの子ら…

まだね…

大丈夫？

だから

泣いたらいゝんよ。

爾に我に返りテ伎與麻娑いまさら目の前に圓位がありけることヲ見出しきかくて今更に沙門圓位笑ミてほゝ笑みたるを見けるに

哭きなさいな。

爾に思はずに伎與麻娑號泣し頰れ卧すものノ圓位が足にすがりつきテ泣き喚きたるヲ

泣けばいゝんよ

爾に伎與麻娑ひとり都舞耶氣良玖

薰った。

ほのかに薰らす。

その沙門は。

法衣に。

肌に。

だから匂った。

なぜ？

女ものゝ香水の匂い。

微かにだけ。

最初は香の匂いかと思った。

その老いぼれた沙門。

文果は云った。

いつか。

なんどめにか。

その時。

珠美と雙兒の身の上の相談に寺を詣でた何度目かの歸りに。

文果はふとわたしの耳に口を寄せた。

いたずらめかして。

さゝやいた。——あれ…

ね？

なに？

あれ…

なんだよ——あれ、香水よ？

なに？ と聞き返す私を勝手に捨て置き

——あれ、女の物の香水。ポワゾンの赤い丸い瓶…

文果の髪の毛が匂った。

——強烈に甘い…
だから笑んだ。
年よりは若く見えた老いぼれの圓位は皴塗れの顔に。
文果の屍。
むりやり義眼を入れたその顔を見て。
すこしの無理もせず。
あまりに自然に。——いゝ、顔ね？
——こんな…
——どんな？
——傷だらけですよ…
——癒えないよな…亡くなってるから。
——無残な…こんな…
——こんな無残な？
——だってそうでしょ？
——むごたらしい？
——違います？
——いいお顔よ。
——なんで？
——陸地の低さを心の底から知らないとね…
——なんですか？
——空の高さはわかりますまいよ
——なにを…
——いゝお顔よ。
——こんなふうに死にたい奴なんていますか？
——わたしね…
——います？ こんな感じに、
——今度生まれ変わったら
——あなた死にたい？
——次はね
——こんな継ぎはぎの顔さらして？
——食用の豚に成ろうと思う。
——豚？
——自分が俗世に食べた分だけね。次は鶏…次は牛…
——食べたから？…殺しちゃったから、
——次は草…
——ですか？
——成佛というのはそもそも輪廻転生をもうしない最期の肉躰を得て失せるということ。
けれどもが。そう考えるといつまでもいつまでもこの濁世にね。生まれ続けないと…
とても成佛はしてられない。あるいはそれをこそ成佛というべきか知らん。

いつまでも。いつまでも。轉生のうちに。むしろそれをこそ願ひ、…だから。
——ただ、それは…
——いつかはこんな顔してわたしも死ぬでしょうよ。…今生の果てる際の顔にでも、
ひよっとすればね…
雙兒ちゃんは？
と。
沙門圓位は云った。
上に…と。
だから笑んだ。
さゝやいたわたしに頷いた圓位は。
ひとりわたしにだけ笑みをくれ、そしてすり抜ける。
わたしの傍らを。
床は軋んだ。
板張りの厥れ。
二階に雙兒を圓位は見た。
わたしと俱に。
雙兒の部屋に明かりはともされ、厥れは電氣の明るさ。
感じさせる。
あわいオレンジの色みを。
西淨は呼吸器チューブの送る酸素を肺に直に息遣う。
誰かの血液が人工心臓に運ばれた。
鳥雅は壁にもたれた。
床に座ってその刹那にこぼす。
その微笑みを。
まなざしの捉えたその沙門のすがたの一瞬に。
素直な子。
無垢の美しい…嘆かわしい程に。
ただ美しい。
素直な子。
見た。
その笑む顔のけなげさをわたしたちは。
ふたりで。

乃爾圓位笑ミて胸に手を合わせ斗璃摩娑ヲ見て觀畢るにひとり白さく——お美しいお顔
など故レ伎與麻娑は手招キ斗璃摩娑を呼べば爾に白さく——挨拶しないとなく故レ斗璃
摩娑笑みたる顔を瞬時に凍らせ且つは沙門を見テ觀畢りたるにふたたびに笑みテ白さ
く——よろしく願ひしますト故レ沙門問ひて白さく——よろしく？ と故レ斗璃摩娑躬
づらの言葉の失言たるやも怖れつつにも殊更に笑みテ白さく——おばあちゃんをよろし
くおねがいしますと云へば沙門問へらく——おばあちゃんを？ と故レ斗璃摩娑沙門を論
すにも似て答へらくハ——おばあちゃんすぐく大變だったから天國に連れて行ってあげ
てくださいト答へたるそノ聲のひびきをはらぬに伎與麻娑ひとり目ヲそらしきは是レ心に

思はずに悔恨にも似てたダ躬ヅからを責める思いのみ生じたる故なりき沙門白シけらク
は——いゝ子な。
とかくテいゝよ。
とかくテわたしがな。
とかくテわたしがおばあちゃん。
とかくテ連れてってあげる。
とかくテその、お手傳いしたげる。
とかくテ…から、あなたもお手伝い一緒にしてな。
とかくテ沙門部屋を伎與麻姿と且つは斗璃麻姿と俱に出でたるノちに俱に娑娑彌氣囉玖

——うつくしい子よな
——鳥雅？
——あの子ども、あの…腫瘍…
——酉浄みたいな…
——あの腫瘍もってうまれたんでしょう？
——そう…そもそもは同じ…あれよりはひどくなかったんですけど…
——それがいまや…
——いきなり、剥がれるおちるみたいに綺麗になって…
——奇蹟よな
——だから心のどこかで…
——奇蹟の子だと？
——だったとして、酉浄のほうもいつかそうなるんじゃないかと
——あれ、原因は何なの？
——わからないんですよ…いまゝでにああいう症例の報告も無い…すくなくとも先進國
では…
——それでもなんでも、あれは綺麗な…
——まだ子供ですけどね…
——女の方たちも放っておかないようなね…やがては…
——たゞ…
——なに？
——どうなのでしょう？
——なにが？ とかくて伎與麻姿ひとりシて娑娑彌氣囉玖
あまりにも彼は
むしろ澄んだ水に
見過ぎたと？
おぼれるような微笑は
あまりにもおゝくの
まるで不意の夢のようにも
嗅ぎ過ぎたと？
ゆらめくようなその聲は

あまりにもおゝくの

聞き取られなかった幻じみてその

多くの人たちの陰惨の匂い

行く末の暗さを

その色をだけ

暗示したかに

乃爾圓位笑ミテ胸に手を合わせ斗璃伎與ヲ見て觀畢るにひとり白さく——奇蹟よなト故レ聲聞きテ聞けるがママに伎與麻婆白さく——生きてるのが？…と、ただ、ぼくがおもうのはと故レ返り見もせずその背後の聲を聞けるが儘に圓位白さく——なに？ と故レ伎與麻婆答へらく——無理やり生かしてる、そんな気がしてと故レ圓位問へらく——そう

な。むりやり…機械使ってな…自分で呼吸もできないん？

——かなり、難しいですね。

——心臓は？

——かなり…負担が強いらしい…その、腫瘍が圧迫していて…とか、いろいろ説明は聞

きましたけど

——自然には生きて行けないな

——だから、思うんですよ。

——無理やり生かしてる？

——違います？

——悩ましい？

——正直。

——そう…と沙門圓位答へテ返り見背後に従ひタル斗璃摩婆を見テ觀をほりタルに白

しけらくは——なんなんだろうな…

——なにが？

——命…かくテ沙門圓位ひとり思はず笑ミたる顔を斗璃摩婆は見き故レ圓位白さく——命とはなんぞやと。それ、問うものは吐いて捨てるほどにもいようけれども、答えられた人はいるのかな？…ね？ 色も受想行識もそれら悉く是レ空なりと。云えば慥かにそうに違い無く息であるもの皆常ならずと慥かにそうはそうに違いなくしかれども。どう？ それはイノチの営みのことであって、じゃあイノチとはなんであるかと、そう問うならば、…どう？ あなた応えられる？

——わたしは…なんですか？

——わからないト沙門圓位白シテ笑ムを斗璃摩婆かたわらに見上げテあれば思はず斗璃摩婆ひとり言散けらく——いゝ匂い…と故レ圓位斗璃摩婆を見やりタルに斗璃摩婆ふたたび白しけらく——いゝ匂い、するト故レ沙門圓位見て見やりつつも斗璃摩婆があたまを撫デやりタルを伎與麻婆たダ笑ミテ見たりきかクテ沙門圓位ふたたび伎與麻婆と布美迦の前に座したるのちに俱に娑婆彌氣囉玖

どうしたいん？

なにが、ですか？

あの、腫瘍の方の子…

酉淨？

前も聞いたな…でも、あのころは他に、奥さんも
もちろん。存命でしたね。
あなたは今、どうしようと？
生き続けさせるか、ですか？
ひとりでは…自立して生きていけないんでしょう？
実際は、そうですね。…チューブ一つでも外せば…
どうしたいん？
殺すかと？
それは言葉悪すぎる
違います？
違わない。
いや…実際…
まだ決まらない？
決められないでしょう？…ぼくだって…
悩む？
毎日ね。いつも
でもそれは
悩まない日なんかありませんよ。考えない日は
惰性よ。
毎日？
息させてある今の、あなたの決められない懊惱の毎日。
惰性？
違う？
殺して仕舞えと？
そうは云ってない。
でも
生きさせるにも殺すにも、たぶん、あなたは決断しないといけない…
どうしろと？
自分で決めるしかない…
住職だったら？
かくて伎與麻婆爾に
わたし？…
都御耶氣良玖
軋んだ。
板張りの床。
沈黙圓位を捨て置き階段を下りた。
床は軋み、わたしは聞いた。
振り返もしない頭の上に。
背後のその聲。
——生かすかな。わたしは

——命の尊厳って…
圓位の聲を
——生かすな。所詮
——慥かにね…殺していゝイノチなんて…
耳に聞きながら
——この、な…この前例も無き
——でも、煞さないことは尊厳かと
壁の向こう
——所詮はすべて未曾有のな、命。
——そもそも尊厳とはなんなんだと。
聞こえていたのは
——この命、な。
——ぼくだって思う。
雨
——いっそ未曾有に生まれたのならせめても
——生きてくれと。
六月の
——せめてその成れの果て
——けれども彼は
静かに音を空間に撒き
——行きつくはてを見て果ててやろうかと
——彼に意識が
まき散らしながら
——そんな勝手な思いの故に
——僕と同じ意識があったらね
ふれるすべてを
——不届千番…己が我がまゝ
——そうした彼は
濡らす雨の
——その故に
——例えば僕が彼だったら？
その音が
——それでもなおも生かして見るな…ただ
——それでも息ていかなければ？
壁の向こうに
——所詮はそれこそ生躰実験。
——それはもはや尊厳じゃなくて
耳の近くに
——無慚よな。
——むしろたゞひたすら暴力じゃ…

わたしは聞いた。

——わたしもあんたもあの腫瘍の子ども

——俺、自分勝手なんじゃない？ って。本人の

ふる雨は

——なんとももはや。

——意思が不在…

すべてものに

——無慚よな。

——どっちにしても…

艶をあたえて月の光りのそゞぐ下に。

降る雨は。

その降る雨は。

かく聞きゝかくて比登らが古與美ノ貳仟拾壱年爾に斗璃麻沙九ツになりき故レ爾に斗璃
伎余許許能都になりき迦豆囉岐ノ又ハ迦我ノ又は古布ノ斗璃摩娑いよいよ綺羅らしかけ
りけれバ育てノ親たる笈賀ノ伎與麻娑その綺羅らしきを愛でゝ飽かず迦豆囉岐ノ又は迦
我ノ又は古布ノ斗璃伎與かハラズ差し込まれタルチューブが故にイノチを腫瘍の重きが
内に息吹ケば育ての親たる笈賀ノ伎與麻娑その痛ましきをし迦那シ美て飽かず愛でたり
てシかすがに布美迦己に失せたらばその幸キ陶麻ノ御子が介護すデに伎與麻娑が手には
餘りき故レ登喇伎與かノ祇樹古藤記念園に收容されたりき是レ布美迦が法要畢りたる後
のすぐさまなりき故レその娑伎陶麻能美許爾に沙羅樹の花咲ク狂人ノ園に母と俱なりて
ありき棟を別にす西の棟に布美迦ありて花喰ヒちらせば東の棟に伎與麻娑瀛ミ爛れを纏
ひて憩ヒき故レその年の六月の雨の雫散らす中にも伎與麻娑そノ登喇摩娑を俱なひて祇
樹園を詣でしかくて爾に斗璃摩娑ひとり娑娑彌氣囉玖

匂いを嗅いだ

極樂鳥花

何度目かにも

その花の

毎週に

母の唇を汚した馨り

日曜日ごとに通ったそのたびごとに

又は白百合

幾度目かにも

時に庭に咲く

その花の

蓮華の花も

咲く花たちの匂いを

沙羅の花

わたしに断ることもないまゝ

降り散る花も

わたしの鼻孔は吸い込みいつか

母の唇に
ひそかな歡びをさえ
かくて斗璃摩娑
したたる花汁に
爾に都舞耶氣良玖
引き攀らすのだ。
淨雅はいつも。
祇樹園詣でのその前。
門の前で。
門の近くで。
或はその柿の樹の影で。
引き攀らすのだ。
わずかに顔を。
その頬を。
時には眉を。
なぜ？
跳ねた眉。
頬。…殊更な故意の笑みに崩してみせても。
引き攀らす。
だから野放しのひとたち。
祇樹園の中は野放しのそれら不可解な人々に溢れる。
騒がせる。
いわばその野生の人々を。
思った。
彼等は圍い込まれながらひとりで息していたに違いなかった。
彼等の領野に。
だから聽いた。
時には怒號を。
野生の唇に。
自分で嚙んだ唇の血に沾れた顎に。
鼻水を光らせた鼻孔に。
或は介護士が時にたまらずに上げたその怒號。
素直にさらした憎しみの。
赤裸々に明かした輕蔑の。
聲。
壁の翳りにいつかひとり泣いていた男の震える肩を私は見ていた。
それ。
介護士の男。
彼は壊れるに違いない。
侮蔑があった。

その男を慰めるかたわらの介護士。
その眼差しに。
嘲笑になる寸前の笑み。
あくまでやさしい慰めの。
そしてそこには在る気がした。
彼の剥き出しの倦怠が。
いつか殺しうだろうか？
彼等は。
淡いブルーの制服の儘で。
私はだからふたりに笑んで会釈する。
わたしの美しさはまさに匂い立つ。
わたしの美しさはまさにきわ立つ。
ひとでさえないあたらしいイノチたちの群れの中で。
かれらの擧げる喉のノイズのつらなりのなかで。
わたしの美しさはひとりで薫る。
たぶんわたしだけが人間だった。
見た。
いつかの日には両眼に白い包帯を覆ったひと。
おそらくは女。
その女がわめく男に殴打され、それでも。
それでも？
明け開いた口は叫びさえせずに。
なにも？
だれにも気づかれない儘に。
棟の翳りの青む暗がりの土を嚙む。
だから嗤ってあげる。
わたしは。
彼等に貪られた彼等のふれ合いをそっと。
わたしの眼にはすこしだけ暴力的に思えたとしても。
伎與麻婆は云った。
頭の上で。
——行こう。
お母さんが待ってるから…
その体躯で隠した。
私の眼から。
野放しの彼等の心のふれ合いを。
拳と頬のふれ合いを。
拳と額のふれ合いを。
拳とこめかみのふれ合いを。
拳と唇のふれ合いを。

拳と鼻血のふれ合いを。
拳は自分の皮膚の裂けた血にさえ霑れていた。
齒のせいで？
見た。
いつかの日には梅の葉。
花はない。
庭の東南に立った梅の細い木にしがみつきその男はひとり天を仰いだ。
おそらくは。
あるいは彼は樹木に這う蛇だったのか。
あるいは彼は樹木にへばりつく虎だったのか。
あるいは樹木に飛び交う蚯蚓だったのか。
見た。
その女。
いつの日かには土に顔面を押し付けながらひくゝつぶやく。
その女。
だれかとゝもに。
その女。
ひくゝつぶやきまるで一人で二人分の聲を。
その喉はかさなる聲を出したかにも思えてひたすらに目を剥きつぶやく。
違う、と。
思った。
わたしたちは違う、と。
わたしは。
彼等、或はわたしたち、此のそれぞれにあたらしい固有のイノチが決して。
決して同じでなど。
その形さえ。
淨雅はひとり引き攀っていた。
決してふれ合わない他人事の希薄なまゝの濃密。
ふれ会う。
所詮彼にとって同じ場所にさえいなかったまゝに。
わたしたちはふれ会う。
共有されたなにももなく。
彼等のだれもおそらくはかつて誰も見なかったその風景の中にだけ目覚めていても。
だからわたしはひとりで退屈する。
彼等の誰もがすでに散々誰かしらに見られたに過ぎない。
過去にも何度もくりかえした風景。
そのいつもの風景に迷い込む。
そうだったにすぎなくとも顯らかな他人の彼にとっては。
お前の耳は鳥。
彼にとっては。

人の躰を持った花。
彼にとっては。
すべてものが言葉を發した。
彼にとっては。
あなたの血はいま沸騰したのだろう。
彼にとっては。
ひざまづいて虫の蝶になる刹那を穿て。
彼にとっては。
花の匂い。
それら他人ごとの群れのさなかに。
多摩嫩の狂った眼差しと唇。
花の匂い。
それこそが加賀淨雅を引き攀らせた。
とめどもなく。
言葉もなく。
こらえようもなく。
引き攀らせ続けた薫る花。
淨雅の眉はわなゝき引き攀る。
花。
淨雅の臉はわななき引き攀る。
色めきの花。
淨雅の眉はわななき引き攀る。
その花汁。
香れ。

かくテ伎與麻娑爾に斗璃摩娑ひとりヲ俱なヒて義理の娘なる陶麻美を詣デき乃爾陶麻美が個室ノ戸を開けたルにそこうらかに綺羅らぐ窓越シの陽光照りタればなり故れ直射したるモノノ表面ことごとくにあわく綺羅らがサレキ且ツは光りになづられたるものノかたち翳りを落シテ斜めに長く伸びたりキ是レその日曜日が午前ノ淺き時刻なればなり故レ物と物らそれぞれに綺羅らぎて綺羅らにそのそれぞれの色を曝シキ且ツハ翳リノ色纒かに青みて色ミたち床にも壁にも物の上にも物ノかたちを曝シキ爾にフタりの眼差し終に厥れ陶麻美が姿をシミいださザリキ所以者何陶麻嫩にそこに在らざればなり故レ伎與麻娑返り見もせずテ斗璃摩娑に白さく茲にいろとそノつぶやく聲ひたすらに穩やかなりキカクテ伎與麻娑ひとり受付に駈け下りたレバ担当シたる笠原ノ一二三を呼び出し問へらく——いないんですよ。…部屋に。うつしました？ どこかに…どこに？ とその聲焦燥ノ色顯かなりキ故レ笠原事務室飛び出したりテふたりシテ探すに東ノ A 棟の一階に多麻美が姿あらざりキ且ツは二階に多麻美が姿あらざりキ且ツは三階に多麻美が姿あらざりキ故レ又ふたりして探すに西ノ B 棟に多麻美が姿あらざりキ且ツは二階に多麻美が姿あらざりキ三階に多麻美が姿あらざりキ故レふたり語り相ひて白さく——今朝は部屋におられたんよ。

——今朝は、でしょ？

——本当にな。今日はなんにも
——心当たりは？
——なんにも變なこともなくてな。
——逃げた？
——普通に素直でいられてな。
——逃げられます？…
——けれども…
——逃げられるか…すぐ。
——ほんの三十分前よ。部屋におられたの。
——庭は？

かくて正門のかたに庭を見渡シ庵麻美ハあらず又裏門方に庭を見渡シ庵麻美はアらず故
レ行く場所も無くテふたたびに病室にもドルも爾時部屋は無人なりて人の影だにモなか
りきややあつて思はずに伎與麻娑思ひ出しテつぶやけらクは——あの子は…

——あの子？

——あのこ。

——お孫さん…

——あいつもト此の時部屋がうちに既に斗璃摩娑が姿失せタリき故レ不意に伎與麻娑齒
齧ミして故レ笠原顔の左の横にそれ齒齧まれ軋む音ヲぞ聞きたりき故レふたり娑娑彌氣
囉玖波

つれさった？

おかしいよ

あいつが…脱走して？

お孫さん迄…

息子を連れて？

あの娘さんも…

脱走を？

そんなに暴れる人じゃないんよ

どこに？

おとなしい

どこにひとりで…

ときどき咬んで…

四面海でしょ…

囁みつくけどな…

海の中に？

わたしも腕をね…

あのこを連れて…

どこへ行ったん？

九歳の？

だれか連れてった？

海に？

どこの誰？
…ね？
園の誰かが？
海に？
かくて伎與麻婆爾に
まさか誰も
都儂耶氣良玖
息を吐いた。
思わずに部屋の外に出て靠れた。
背を。
廊下の窓に背を靠れて息を。
その音を。
耳に聞いていた。
聲ではなくて。
物の音でもなくて。
笠原の息を。
不意にかたわらに吐かれた彼の息を。
笑った息使い？
なぜ？ と。
彼は笑った。
わたしがなぜ、と思いかゝったその時に。
彼は笑っていた。
邪気もなく。
素直に。
怒りを感じかけた時に終に嗤う。
笠原は。
はっきりとかたちをあらわした笑い聲。
振り返った須臾笠原は耳元に云った。
——あれ、見て。
——なにを？ と。
見ていた。
喉の奥にだけさゝやきかけたその時にすでに。
わたしは。
笠原の窓の外に投げおろした眼差しを追った兩眼に見下ろされた樹木。
中庭の。
もうすぐ三階の胸先にさえ届きそうなそれ。
沙羅の双樹の葉の茂り。
繁る緑の間ゝに散り咲く花々。
その色の散乱。
おびたゞしい沙羅の樹の花たち。

散乱。
いた。
少し見下ろす樹木の枝の高い先端。
わたしの眼差しの纒かの下。
伸ばした手の決してとどかないそこに多摩美はひとりいた。
枝に足を掛けて。
葉と花の切れ目に姿をさらした。
葉と花の茂りに姿をかくした。
彼女がはだけた太もゝの剥き出しに絡まる葉。
からめた枝。
おしつぶされたその贅肉の無様。
白い肌に翳。
翳りは青む。
息遣う唇。
鼻にかゝる葉のゆらぎ。
見た。
わたしたちは。
沙羅の純白の花を喰いちぎる陶麻美の姿を。
身を曲げてその枝らの上に。
身を振って複雑に絡み。
蛇のようにも？
蜥蜴のようにも？
沙羅の花らはゆらゝぎ揺れた。
沙羅の葉ゝさえゆらゝぎ揺れた。
わたしは見ていた。
齒は千切る。
そして咀嚼を。
わたしは見ていた。
散る花汁を。

陶麻美智都伎迦美智岐琉たびに揺れればその葉も且つは陶麻嫩智都伎迦美智岐琉た
びに揺れればその花もかくて地に墜とシたるその翳りも由羅うぎ揺れて揺れるまゝその
色はとよみき故レ地に墜チたる影らノとよみの下に厥れ斗璃摩娑はひとり見上げたりき
花喰フ陶麻美を見あげたりきかすかに斗璃摩娑ひとりほゝ笑みたれば爾に伎與麻娑窓開
き下に斗璃摩娑ひとりの耳の爲に叫けらくそこにいと故レ伎與麻娑ひとり階段を駆け
下りき故レ笠原追ひて駆け下りきかくて中庭にたどり着きたるに斗璃摩娑ひとり樹木投
げたる翳り且つは樹木を徹す木漏レ日に照りて昏ミ且つは綺羅らぐ上を見て見上げて笑
みつゞけてやまず故レ娑娑彌氣囉玖

色を見た

かさなりあって

ゆれるその色

きらゝにも
いろいろな
うつろにも
様々な色
くらくにも
ひかりと影の
くらませつゝも
ときほぐせない
かさなりあって
渾沌の色
ゆれる色彩
混濁のない
乱雑な
あざやかな色たち
ざわめきつゞけた
かくて斗璃摩娑
その色たちは
その伎與麻娑と又
ひゞく
笠原とだにも
葉はすでに鳴った
俱なりて爾に
顔の遙かな上のほうで
都舞耶氣良玖
わらったの。
ここに…
まさか
いきなり。
ここにいたのか…
自分で？
わらったこゑがした。
いつから？
自分で上ったってこと？
ちがう…
いったろ？…俺は
あんなところに？
ちがうんだよ。
あそこにいろって…
いや…
そうじゃない。聲…

あぶないから…
女のちからで？
喚き聲？
いろんなひとが…
しかも
べつになにも怖くないのに。
大丈夫？
女ひとりで？
別に何もかなしくないのに。
ここにいたの？
たしかに…
別になにも
ずっといた？
いや
痛くも無いのに？
おかあさんも？
たしかに毎日
その聲。
いつから…
食べるんですよ
喚いた聲。
いつからおかあさん…
花…
聞こえた気がして。
木の上に？
いつもね
聞こえたから。
いつか木の上、
気が付いたら
窓を見たの。
ひとりで？
花瓶の花でも
ろうかの窓。
ひとりで、お母さん、此の木に
樹になってる花
そこにお母さん、そこに居たよ。
いつも？
庭の草の
樹の上にいる。
いつも上るんですか？

鉢植えの
ひとりでいて。
結構…
花壇の華まで
そこにお母さん、僕を見て。
落ちたりしない？
たしかに食べる
見てたよ。
折れないの？
地面の花
ぼくを。
枝…
これ
花食べながら。
結構高いよ
この沙羅の花も
だから。
あれ、もう…
食べるけど、でも
花食べながら。
てっぺんの方…
まさかひとりで
だからたぶんお母さん、一階から。
いつも上るの？
樹にしがみついて？
地面。
あんなところに…
この花ね…
地面からほら。
どうやって？
一年中咲くの
樹に上って。
どうやってあんな…
此の樹の花はね…
この樹に上って。
大丈夫？
だからよく食べられるの
だからお母さん会いに来たんだよ。
お前…
珠美さん

ぼくに。
大丈夫？
お腹こわすけどな
子供に。
お食事だね
いつも
逢いに來たんだよ。
な？
食べた後いつも
生んだから。
お母さん、な
吐いたりな…
自分で僕を生んだから。
食べてるね…
まさか
だからお母さんに逢いにここに來た。
おいしそう？
どうやって？
お母さんの下。
食べちゃダメだよ
どうやっておろす？
おかあさんの處に。
あれは特別
あそこから…
けどぼくは今。
お母さんだけの
呼んでもあのひと
お母さんからもっと離れた。
お母さんだけ、食べていいの
反応されない方だから
同じ地面に立ってるのにね…
お花すきだから
喚んでもね…
地面の方に降りて來たのに。
綺麗だね
いつも呼んでも
僕はお母さんのいないところに來た。
見てあげようね
耳もとで呼んでも
お母さんは今

お母さんの花
降りてこられる？
空の上の方…
綺麗だね。
どうやって？

于時斗璃摩娑おもはずに目をし見張りてかくて何をか口にさサやかんとするかにも見えてシかすがに多摩美を見て見上げたる伎與摩娑は故レそれを見ざりき故レ終に氣付かず過ぎたりきかくて斗璃摩娑おもはずに目をし見張りてかくて何をか口さサやかムとするかにも見えてシかすがに多摩美を見て見上げたる迦娑破羅ハそれを見ざりき故レ終に氣付かず過ぎたりき故レひとり斗璃摩娑おもはずに目をし見張りてかくて何をか口さサやかんとする唇言葉の欠片にダにふれることもなく見ひらける眼差シの向カウに女ひとり娑娑彌氣囉玖

見た
喰いちぎれ
醒めながら観る
食え
その夢を
喰いちぎれ
夢？
食え
まぼろしを
咀嚼して
いや
唾を吐き
夢を？
したゝる唾液
まぼろしさえも
喰いちぎれ
わたしは見ていた
食え
息をひそめもせず
血をすゝり
なぜ？
すゝりあげても
息をするさえ忘れていたから
喰いちぎれ
息をするさえ忘れていたから
食え
かくて斗璃摩娑爾に
その一瞬には

都舞耶氣良玖

わたしだった。
それら。
無数のわたしが。
喰う齒。
わたしだった。
齒。
それら。
花々は。
わたし。
齒と齒の咀嚼
その花は。
わたしだった。
無数の私。
喰われた。
わたしは。
その齒。
齧みあう。
千切る。
嚙みあう。
その齒。
母の。
その齒に
珠美の。
齒。
彼女は。
わたしは。
ひとり喰いちぎる。
私の肉を。
咀嚼した。
音を立てながら。
彼女は咬んだ。
母は喰った。
わたしの肉を。
母はしゃぶった。
私の骨を。
ゆらぐ花。
わなゝく。
散らされ。
喰う。

散る花ら。
喰う。
齒。
齧む齒。
齒。
齒が喰う。
わたしを喰う齒。
飛び散った。
わたしの血の珠。
珠散りながら。
花らは散った。
齒茎に散って
なぜ？
わたしの口は味を知る。
その花の。
齒の咀嚼。
齒と齒。
味を知った。
わたしの齒茎が。
肉の味。
花汁散らし。
わたしの肉の。
齒。

故レ爾に笮頭羅岐ノ又は古布ノ多摩美ひとり沙羅ノ双樹が北東の一本ノ枝の上によジ登りて見上げたる葉と葉ノ又枝と枝ノ又花と花ノの逆光ノ翳り又至近の色又漏れる光のそれらさまざまの散乱ノ内に花なす花ノ唇と齒又齒と舌又舌と顎又顎と喉とに喰ひ又咀嚼し又飲み又粘膜に散る花汁舐メて娑婆彌氣囉玖

見なかった
ゆれるのは
それら色彩の散乱
色がゆれるのは
そのうちには
ゆらがせた
わたしの姿を
此の唇の
見はしなかった
ふるわせたから？
わたしの目は
かくて斗璃摩娑
その内に猶も

爾に都舞耶氣良玖

笑ったのかと思った。
声を立てゝ。
だから思った。
笑ったのかと。
その葉と花と枝の向こうに見上げられた人。
その姿は。
見た。
わたしは。
踵を返して頭を下に。
彼女は。
猫のように
母は。
あるいはそれは蛇のように。
枝と葉。
葉と花。
花と幹。
巻き付いたそれ。
虵のように。
古布多摩美は。
あるいはそれは蜥蜴のように。
その姿。
その葉と花と枝の向こうに断片として。
群れなす色彩。
光りの綺羅も。
だから見上げられていた。
断片の群れとして。
見つめられたその姿は。
頭をさかさに這う蜥蜴のように。
彼女が樹木を這い下りるのを私は見ていた。
あくまでも葉と葉ゝと。
葉ゝと花。
千切れた断片。
あくまでも花と花ゝと。
花ゝと枝。
途切れた断片。
枝と枝ゝと葉かげに花ゝ。
それらの翳り。
その向こうに。
それらの色めき。

その向こうに。
香り立つ。
そのむこうに散亂した斷片として。
群れた。
見上げられていた。
缺片の群れたちは。

爾に見き斗璃摩娑ハその目に葉と枝ト花の茂りを下りそソ盡きの果テに初めテひとつの
姿ヲさらし出シたるその女陶麻美は頭から幹を這うテ腕を卷く蔦の如ス撒きつかせ幹に
這うソの母の髪を剃レれたル頭部に刺す日の白濁陶麻美爾に幹ヲ降り地に手ヲ附きて且
つは多摩美爾に幹ヲ降り地に足を附きて故レ立ち上がり二足に立ち上がりたるに息遣ふ
その眼差しに笑ミたる色ノきざシたるをは斗璃摩娑ひとりすでに見き故レふタリ俱なり
テ娑娑彌氣囉坎

まだ？
唇に花の
まだ生きてたの？
花の汁の
まだ？
汁の汚れの
まだイキモノのふりをしていたの？
白い花
まだ？
なぜ花の汁は紫の
そこでああなたは息遣い
あざやかな色を
まだ？
曝し得たのか

かくて
あなたは生きてあるふりをする
陶麻美爾に都儼耶氣良坎

ふれた。
わたしはあなたの姿を見詰めて。
ふれた。
まなざしに。
あなたの姿は。
ふれた。
顯らかに。
指先。
のばした指先に。
イノチあるその。
唇の。

幼く夭い。
日差しは照らした。
あなたの。
白濁。
だれ？
色。
あなたは、と。
香る。
いつわたしはあなたを失ったのだろう？
肌の匂い。
目の前の肉の。
髪の毛の。
かつて胎内に息づかせたそれ。
すでにあなたは。
もはや私の胎内を壊し。
すでにあなたは。
もはやわたしの胎内を亡ぼし。
あなたはそこに時のはじめから。
はじめからすでにそこにいたに違いなかった。
あなたに母胎など在りはしなかった。
最初から在りはしなかった。
ふれた。
生きて在るそのイノチのカタチに。
ふれた。
息て在るそのイノチののこす触感を。
齧む。
指先は。
齧みつかれたようにも。
ふれた触感。
齧む。
その触感を。

故レ斗璃摩娑爾にひとり娑娑彌氣囉玖

見ていた
　　くらい
その口
　　逆光のくらさ
微笑んだ形の
　　感じる
そのまゝにひらく
　　光りを

その口蓋の
むしろ
齒の密集に
くらい
踊り上がった
逆光のくらさ
舌の色彩
その中にこそ
かくて迦夜香
唾液の筋は
爾に都儂耶氣良玖
痛みなど。
突き刺さった、…それ。
感じられもしない痛みなど。
前齒はすでに。
感じられもしなかった。
その痛みなど。
額に。
すでに牙のように？
突き刺さった、…それ。
私の額に。
痛みなど。
咬みついた齒は。
感じられもしない痛みなど。
齒は噛み千切った。
感じられもしなかった。
その痛みなど。
飛びった？
血は？
痛みなど。
見なかった。
感じられもしない痛みなど。
玉散る血など。
感じられもしなかった。
その痛みなど。
あなたは咬んだ。
花と同じに。
わたしの皮膚と。
その肉と。
骨をそぐ。

痛みなど。
見なかった。
感じられもしない痛みなど。
玉散る血の珠。
感じられもしなかった。
その痛みなど。
すでにわたしの眼は見つめていた。
ひたすらに澄んだ白濁の光。
温度を以て。
熱狂した。
痛みなど。
冴え切った光。
感じられもしない痛みなど。
醒めた白濁。
感じられもしなかった。
その痛みなど。
聴く。
痛みなど。
耳は。
感じられもしない痛みなど。
感じられもしなかった。
口の。
わたしの口の上げるべきだった。
その痛みなど。
絶叫を？
痛みなど。
聞いた。
感じられもしない痛みなど。
叫ぶべきだった
感じられもしなかった。
口はまさに。
その痛みなど。
喉はまさに。
かくて隋麻美
その激痛を。
爾に娑娑彌氣囉玖
ほゝ笑みあったまなざしのなかに
それを愛と？
ことば？
さゝやきあって

なにをもはや
それでもなおも
見つめ合いしかも
ことばを成さない
なんの解決をみることもなく
それを愛と？
あなたの唇の
なぜあなたを慈しむのか
しずかな息づかいに感じた
なぜあなたを愛しむのか
あなたのイノチを
慈しみというものかたちも知らないまゝに
かくしようもなく
愛しみになどふれたこともなく
わたしはまさに生きていた
それを愛と？
あなたの前に
まるでいきなりふれた狂気
目の前に
ふいに落ちた
しずかな息に
意識の白濁
わたしは感じた
それを愛と？
わたしのイノチも
かくて斗璃摩娑
それをも猶も？
爾に都舞耶氣良玖
唇は唇にふれた。
齒は唇に。
唇はふれた。
噛み千切る。
わたしのそれを。
噛み千切る。
母の齒の群れ。
玉散る血などは見なかった。
おそらくはすでに？
珠美はわたしを貪り食う。
すでに。
花のように？

玉散る血などは見なかった。
すでに。
貪り食う音。
咀嚼の音ら。
引きちぎられた痛みなど。
すでに。
花のように？
沙羅の花。
花汁を散らす。
花のように？
すでに。
玉散る血など。
すでに眼差しを掩うそれ。
白濁の。
高熱の。
高温の。
冴えた白濁。
澄んだ白濁。
感じられない痛みの中に。
発されなかった叫びの聲のそのとよむ音ら響きの中に。
失神したに違いなかった。
わたしはすでに醒めつゞけ乍ら。
あたまから食い食られながら。
狂気の母は。
狂った母は。
夢を見ながら？
その咀嚼。
夢の中にも？
その咀嚼。
夢のようにも？
咀嚼する歯とすゝりあげる舌。
喉。
その音響さえも。
わたしは見ていた。
その顔を。
貪り食ったわたしの顔を。
母の眼に。
彼女の。…
わたしの目はいま顯らかに生きた。
母の歯に。

その女の。…
わたしの齒はいま顯らかに生きた。
貪り食った。
血は散り玉散る。
音響は。
すする咽の。
齒の咀嚼。
音響は。
聲もなく。
花咲く下の花散る中に。
喰った。
わたしは多摩美を。
それ。
母の肉を。
生きながら。
喰った。
わたしの口は。
その肉軀を。
皮膚をそぐ。
肉に齒を立て。
哀しめば？
かくて爾に多摩美
悲しめば？
娑娑彌氣囉玖
だれもたすけはしなかった
たしかに心はあまく
わたしとかれをふたりのこして
あまく苦く
あきらめに似た
痛みにちかい
ほゝえみのうちに
純粹に味覚をだけを感じた
わたしのゆびのふれたそこから
感情と？
目の前で
それでもなおも感情と？
少年はひゞ割れ腐っていった
しかも
その腐臭さえ
名前さえある感情と？

ゆびのなでた唇のそこから
舌に残る
目の前で
残す花の味
わたしの——
唇に残る
彼はひとりで燃え上がり
残した花の
焔の内に焼き焦げたのさえ
咀嚼された
だれもたすけはしなかった
花の汁の
わたしとかれをふたりのこして
餓えた味覚は
あきらめに似た
餓えた味覚も
ほゝえみのうちに
わたしはまばたく
かくて斗璃摩娑
そっとひとりで
爾に
ひとりでまばたき
都儼耶氣良玖
笑む。
唇は。
頬は咀嚼のその肉の緊張。
笑む。
多摩美の肉を引きちぎりながら。
花は降った。
白い花。
雪のようにも？
見上げれば葉の。
緑り散らす色。
葉の群れのなかに散るその花ら。
寄生した白い黴のようにも。
繁殖した白い黴のようにも。
花は白。
笑んだ。
多摩美の血の玉散るなかに。
笑んだ。

花散る下の雪なす花に血。

玉散る血の色。

花にも玉散り

かく聞きゝかくて或ハ頭又は顔面噛み千切られたる皮膚と肉に血を流したる斗璃摩娑
ときれんとすに耳元に遠クにも揺サぶり喚く伎與麻娑が聲を聞きたるものノかの腕に
抱きあげられたるその儘に虚ろなす黒目ノこちら降り注グ木漏レの光の散在を見てまバ
たきもせずて爾に娑娑彌氣囉玖

うめきを聞いた

なかないで

くいちぎられる母の喉の

かなしまないで

さらしたうめきを

ぼくはイノチ

耳はたしかに

あなたはイノチ

聞いた気がした

かくて伎與麻娑爾に

慥かに。猶も

都儼耶氣良玖

失神した。

すでに。

失神していた。

その肉躰を。

ぼくは揺さぶる。

まるでにすでに。

脊椎さえもがくれたかにも。

その肉躰を。

腕に抱えたその肉躰を。

ぼくはゆすった。

花降るなかに。

色散るなかに。

さわぐ轟音。

ひゞく轟音。

人々の聲。

喚き散らす。

怒號。

それらは聞こえていた筈だった。

たしかにそれらも。

かく聞きゝかくて比登らが古與美の貳仟拾弍年斗璃麻沙十になる二タ月前の一月に雪ハ
降りき故レ宮島ノ山中腹なる家に斗璃摩娑爾に伎與麻娑を俱なヒて降る雪を見きかくて

雪シ降りつゝ音もなくにも雪し舞ヒつゝ爾時に伎與麻娑かタわらノまぢかに娑娑彌氣琉
斗璃摩娑が娑娑夜伎の許恵を聞きゝ故レ爾時斗璃摩娑くちびるにその聲に娑娑夜祁羅久

あ、…と

つたわった

あ。

触感として

こぼれる聲に

温度としても

あ、…と

ふともゝにさえ

あ。

その肌にさえ

こぼれた一度のその聲に

失禁の？

わたしは聞いた

明らかに違う

振り返り見た目

失禁とは

加賀淨雅のその眼差しの

ながれる血の

わずかな下の唇の

その触感を

こぼした聲を

そこにはすでに感覚があった

え？…と

濕った感覚

その

ついに零れて

え？

あふれだす

こぼれた一度のその聲に

それは顯らかに

わたしは見やった

はじめて流れ落ちた血

頭のすこし上にすこしだけいぶかる

だったらそれは

加賀淨雅のほゝ笑みの

それは傷口？

目

傷つけられる前には已に
かくて伎與麻婆
開かれていた
爾に

それは傷口？
都舞耶氣良玖

あるいは早すぎたに違いなかった。
雪の日のその鳥雅の初潮は。
感じた損失。
もしも珠美が生きて在ればと。
鳥雅に殺されることもなく。
すでに心を砕いた固有の肉の組成としてではなくて。
もしも珠美が生きて在ればと。
鳥雅は怯えたに違いなかった。
はじめてのその出血に。
鳥雅は知った。
或ははじめて女の軀を。
自分の少年の肉軀に。
哺乳類種の或る一生態。
もしも珠美が生きて在れば。
聲もなく。
開いた。
聲もなく。
息も吐かずに。
その唇をだけ。
細めた眼に。
わたしを見ながら鳥雅は。
わたしを見ていた。——なに？
と。
さゝやいた私の頬は笑んだまゝ。——なに？
と。
あくまでやさしくさゝやく聲は。
もしも多摩美が生きて在れば。
——どうした？
わたしの聲に答えもせずに。
覗いた。
その目に。
鳥雅は。
思わずに幼い右の指先が下着の中をまさぐるのを見た。
わたしの眼は。

ひきだされた指の先端に着いた紅の色を。

見た。

鳥雅は。

怯えるというわけでもなくて。

いぶかるというわけでもなくて。

まして慄くわけもなくひとり。

鳥雅は嗅いだ。

指の匂い。

その血の匂いを。

軀内に芽生えた、——破棄した？

その血の匂いを。

流されたそれ。

イノチなす原型の流した？

あるいは女の軀だけが流す。

血。

かくて伎與麻娑爾に鳥雅が秘めたる性別を知りき故レ斗璃摩娑爾に躬ヅからが秘めたる性別を知りき厥レ成成而成餘る處ノ先端にかスかに匂う血はしたたりきしかれば斗璃摩娑思はずに笑んで伎與麻娑を見き伎與麻娑もはやなにを慄クとも厭フともなクその血を赦シしかれども不意に伎與麻娑思へらくに——なら、…だったら…と故レ駈けるように携帯電話を手につかみとれば爾に想へらく——あの子のほうは？…なら、あの子のほうは？ト故レ祇樹園なる笠原を電話に呼び出しければ笠原出ざりき故レ斗璃摩娑が耳に娑娑彌氣囉玖

待ってゝ

大丈夫？

こゝで

ひとりでいられる？

ひとりで

大丈夫？

待ってゝ

怖くないから

酉淨のところに…

すぐ歸るから

俺、…ね？

ここで

待ってゝ

ひとりで

こゝで

大丈夫

ちょっとだけ

すこしだけ

待ってゝ
かくて伎與麻婆爾に
…ね？

都舞耶氣良玖

彼も流したに違いなかった。
ぼくたちは血に塗れ続けるのだらう。
その同じ血を。
生まれたときから。
女たちの血。
死ぬとき迄。
珠美と同じその血を彼も。
すでにもう、ぼくたちは。
腫瘍の咬んだ肉のどこかに。
血管の中に血にまみれた。
その血を彼も。
滲む組織のなかで血にまみれた。
此の時に彼も。
その細胞は。
塗れたにちがいない。
ぼくたちはだからいつも血まみれ。
自分の流した他人の血に。

かくて雪の中にもバイクに乗りテ走りゆく伎與麻婆を見たル斗璃摩婆ひとり婆婆彌氣囉
玖

流れ出す血の
滲みだす
匂いを嗅いだ
血
さゝやくように
滲みだす
耳元に
赤みのある先端に滲み
さゝやかれたように
零れて落ちる
思い出した
血のその雫
それがほんとうは
怯えるべき？
体内に流れているべきものだということ
おのゝくべき？
その事実をだけ

どうすればいゝ？
意味もなく
かくて斗璃摩娑爾に
こゝにひとりで？
都儂耶氣良玖
わたしは見ていた。
すでにそのときに。
酉淨の分厚い皮につぶれた双眇。
その眼差しの中に。
酉淨の發熱する瘤にうずもれた双眇。
その眼差しの中に。
血の紅に染まった眼差しに。
涙腺にだにも滲みだす。
零れ落ちる血。
穴。
鼻の。
かろうじて押しつぶされずにひとつだけのこった鼻の孔に。
チューブに逆流した血のにじみを。
見た。
二本のチューブを咬んだ口が吐く。
喉にしずかに逆流する血を。
からませあつて。
腫瘍の下に。
腫瘍さえも汚された。
自分の血に。
血にまみれていた。
すでに。
切り開かれた尿道に刺したチューブさえもが。
なにもかも。
切り開かれた肛門に刺したチューブさえもが。
滲みだす。
毛孔にさえも。
あふれだす血。
酉淨の肌を紅に。
穴。
つぶれかけの孔。
耳たぶの無いその穴をも。
半分だけ残ったその耳の孔をも。
聞いた。
血の色のこちらに。

騒音を聞く。
轟音のように。
あわてふためく聲の群れ。
慄き。
喚くにも似て。
酉浄の耳は周囲に立ったそれらを聞いた。
わたしは聞いた。
酉浄の耳に。
同じように。
同じその血をにじませながらも。
感じていた。
酉浄は熱に包まれていた。
その全身を。
不意の発熱。
高温にさえ血は。
故レ娑娑彌氣囉玖
噎せ返る
舐めた
熱に
舌は
わたしの肉は
齒茎に滲んだ
酉浄の
初潮の血
彼の肉は
その血の味を
噎せ返る
舐めた
全身に熱
その温度
かくて爾に
血の味にさえも
都儼耶氣良玖
夢を見た。
噎せ返る血と肉の発熱の味なすなかに。
夢を見た。
何を？
浮かぶ。
綺羅らぐ四方の海に。
浮かぶ。

泳ぎもせずに。
船さえもなく。
魚の気配も。
水母の影も。
すでに肉軀はなかった。
それぞれの細胞の群れがたゆたう。
浪の面にも。
その深いそこにも。
面の下にも。
波打つ須臾の纒かのしぶきにも。
それ。
珠散る瞬時の飛沫にさえも。
水に溶けあうこともなくにも。
わたしはすでに複数のわたしたちにすぎなかった。
故に。
わたしたちは爾に海にたゆたう。
わたしたちは爾に波に由羅らぎ四方の海にも。
差していた。
白濁の空。
霧れる天の下。
落ちた筋。
ひとすじの。
垂らした鋭い絹衣のように。
あざやかな光の。
筋。
切れた雲の落とした光の。
海は綺羅らぐ。
時じくそ猶も。
海は綺羅らぐ。

樂亂二蚊頭囉岐第二

啞ン癡 anti 淤瑠我貳翠夢 organism II

2021・01・07-08 黎マ



亂聲三

かく聞き、爾に斗璃摩沙成餘ノ美蕃登に蕃登ノ血を知りき故レ爾に斗璃伎與躬に孔ナす
孔のことごとくに蕃登の血を知りきかくて伎與麻沙祇樹古藤園を詣ヅるにそれ雪降らす
日ノ雪わずかに積もりテ未だ虚にも散り舞うにも笠原小聲にさサやけらくは朝より斗璃
伎與その全身より出血ありきとさサやきて又さサやけらくはそノ所以我等知らズと又知
り得ズと又知らムとするすベモなしト故レ賀沙波良ノ比布美爾に蚊我ノ斗璃と俱なりテ
娑娑彌氣囉玖

巡回の時に…

何？

朝の…早朝の…

これ、何なんですか？

疾患？…なんなんだろうね？

何が起こったの？

全身からな…

何が起こってるの？

最初斑点でもできたのかと

血まみれじゃない？

匂うのよ。血が

死ぬの？

湿疹なんかじゃないよと

まだ生きてるの？

だた、理由が…

息は？

輸血はまだ必要ないだろうと

いつから…

片岡先生がね

ずっとなの？

止まらないようなそれも必要だけれども

連絡してよ

止血するにも

普通じゃないでしょ

あまり薬とかはいれたくないからな

死ぬんじゃない？
もたないかもしれないから
…ね？
躰が
 見てるよ
とりあえずは静観するしかないと
 あの目
そのうち止まるんじゃないかと
 意識ある？
いまは見てるしか
 あるのかな？…この子
ガーゼで拭ってあげてな
 意識あるのかな？
見てるしか
 他には？
熱が心配だけどな…
 血だけ？
40度越えてな…
 熱だけ？
理由が…
 それだけなの？
細菌でもウイルスでも入って、それでなんかなかったのかと
 病気ってこと？
切れた？
 腫瘍のせいで？
毛細血管が？
 なんのせいで？
だからにじみだした？
 止まるの？
心配だけどな
 血
かくて伎與麻沙
 大丈夫？
爾に都舞耶氣良玖
 思っていた。
 あるいはそれでよいのかと。
 このまま死ぬのが？
 それこそが？
 入れ替わりにうろつく。
 彼等。

遠まきの職員ら。
祇樹園の西棟の病室に。
職員たちは無能をさらした。
取り寄せた防護服代わりの合羽を着た彼等は四人で。
水泳用のゴーグルとたゞの市販のマスク。
たぶん秘かに怯えながら。
血に染まったシーツはすでに二回取り換えたど。
ビニールシートの上に三枚目のシーツを。
呼吸器のチューブにしずかな逆流。
その血の。
ひざしに薄らいだその紅の色を垣間見た。
かすかに綺羅らぐ。
薄まった色を。

かくてその二月ほボー週間の出血もすでに登喇摩沙は畢てき故レその二月ほボー週間の出血もスでに登喇伎與は畢てき故レすでにして伎與麻沙がこころ平穩なるにその日夙夜に斗璃摩娑爾に體に兆ス發熱にめ覺めきかくて指先は知りきソれ指先のフルえを故レ手首は知りきソれ手首の極度に冷えたる低温を故レ足首は知りき冷え切りたるその体温ノ骨にまで沁ミるその体温の冷血の触感のうちにまさに骨髓に兆ス極度の苦痛を故レ背骨のけづりその骨の内に知りキトよむ苦痛のさまざまの痛みノみとよみトよんで叫き聲なスそれ苦痛をシ知りて苦痛をシ知りたれば斗璃摩沙はひとり部屋にめを覺まさせテも人を喚ぶ聲だに喉は知らず故レ呻くとも叫ぶトもナク開かれた大口と鼻開かレた鼻と大口の孔に息ヲ吸いて且つは吐くをは忘レき故レ目を剥き斗璃摩沙娑ひとり娑彌氣囉玖

葉の色は

とををををををと

木漏れの光に

ろををををををと

葉の翳り

なにの音が？

木漏れの光は

ほををををををと

向こうに啼いた鳥のうたにさえ

ろををををををと

ゆらぎもせずに

見ああげた眼差し

ふるえもせずに

わたしはこころに

さわさわと

知っていた

それはゆらいだ

なにの音が？

どこからか風に
あををををををと
それはふるえた
ろををををををと
なにかの足の
それはわたしの
その爪の尖りに
のどが吐く音
かくて斗璃摩沙
とををををををと
爾に都儂耶氣良玖
吹き出す。
液体が。
右の網膜を打ち破って。
散った。
なにかの液体が。
炎がすこし。
すでに肌には。
髪の毛の先さえ。
すこしの焔が。
不意の發火
知っていた。
それらが躰の内にさえも散在していたのを。
気付いていた。
すでに。
燃え上がる熱が。
發熱？
体温の、——肉の？
發熱が。
筋肉と神經を發光させた。
色彩もなく。
血をさえすでに。
匂いさえなく。
匂う。
わたしはみずからの肌の纏う芳香のさわぎたつのを。
醜酔したにも。
腐りかけたにも。
いよいよ馨りを強烈にして。
私は搔いた。
心のうちに。

自分の喉を。
その爪の尖りに。
自分の胸を。
網膜を。
齒茎の粘膜。
内臓の中を。
蝶のひだを。
大腸の湿度。
心臓の中の強靱な筋肉を。
肉のことごとくの筋。
神経のすじも。
口蓋がはじけた。
内側から這いあがる肉軀に。
口蓋は。
吹き飛ぶ頭蓋に引き出された喉の内側は外氣にふれた。
噎せ返った。
すでに痛みのすさまじい叛乱。
聲もなく。
吐く息も無く。
噎せ返った。
苦痛にだけに。
あざやかなそれら。
痛みにだけに。
毎秒の失神に毎秒に目覚める。
産毛のすべては焔を發した。
故レ斗璃摩沙は震エル指に虚空を撫でタしぐさを又は震える爪に例えば花卉にやさしく
ふれるその仕草を又ハ震える手首をへし折ったようにさかむければ爾にひとり娑婆彌氣
囉玖

蝶の羽根の舞う色を見た
すでにして
失語した
ほろびた夜は
朝やけの中に
すでにして
その光に
なげうつひかりは
なゝめに
燃え立つように
舞うその色を見た
かくて斗璃摩沙爾に

吹きかけるように
都儂耶氣良玖
乳色の液体の飛び散るのを見た。
皮膚の孔。
孔のすべてに。
涙なして眼窩にあふれて。
嘔吐するかに。
口に吹き飛び。
乳色の匂う液体の。
毛孔にあふれて。
受胎？
と。
わたしは苦痛の中に笑う。
無様な受胎、と。
肉と肉と引き裂かれあい。
或は食い散らし合う。
それら苦痛の鮮烈の散乱。
わたしはひそかにむしろ笑った。

故レ斗璃摩沙床の上かろうじて息てかろうじてイノチを保ち或ハかろうじてカタチなす
まマ這い匍うてのタうちひとり娑娑彌氣囉玖

朝の靄は
まばたく
明けの紅蓮に
なんども
陽炎ばかりを
まばたく
霑うまに
かってに
葉のさきに
まばたく
雫、夜の靄の
もはや
ぬらした露の
たにんの？
雫。落つ
それ
かくて斗璃摩沙
まぶたに
爾に
まばたく

都舞耶氣良玖

ゆがむ肉と骨格。
神経と血。
脳と骨髄。
それら。
引きちぎられながら吐き出したイノチを。
あえぐ。
あたらしい鳥雅が。
血の中。
自分の血と。
匂いの中。
自分の匂いの中に。
わたしは見ていた。
床に匍う。
孔を食い破って吐き出された鳥雅のあたらしい肉が。
這う。
わたしの床にのぼした足さきに。
立ち上がった。
カーテンを引き開け光を。
朝の。
明けの紅蓮の。
とおくに海の。
綺羅と。
見た。
足元に。
床の上に。
這う鳥雅を。
その異形の肉のカタチを。
腫瘍に塗れた？
ないし、腫瘍そのものにイノチをなした？
肉を食い破る骨。
あるいは骨を砕いた肉の膨張。
その形はやわらかくそして匂いたつ匂いを嗅ぐ。
鼻孔。
のたうつ。
わたしの鼻は。
のたうつように。
床を這う。
子供？
ないしわたしそれ自躰が。

窓の向こうに鳥が飛ぶ。

啼く。

飛ぶ。

鳥が啼く。

だから身を潜めていた。

土の浅い内側に居たそれ。

桃色の蚯蚓は。

濃い褐色にも近いピンクに。

桃色蜥蜴の裸の皮膚は。

その潤いは。

故レ斗璃摩沙たタずみたるうちに登喇摩沙床を這ひ匍ふて匍匐ヒはうに窓越しの朝の日の投げ落ちるを斗璃摩沙は見き故レ体液のすぢひく床のきらめキにも眼を奪はれき爾に登喇摩沙肉に比布にわなナきゝかくて斗璃摩沙ひとり娑娑彌氣囉玖

あまやかな匂い

生きてあれ

私の周囲に

光の下にも

かれの放ち

鬩りの内にも

わたしの放った

生きてあれと

わたしたちの

ささやく聲のみ

あまやかな匂いに

聞き取るものを

かくて斗璃摩沙追ひ追ふて掩ふ空の雲れる白濁の下朝の庭に

みたされた鼻孔に

都儂耶氣良玖

露の色

目には見えない透明の。

色。

色の無いかたち。

散乱。

水滴の気配が。

あふれかえった。

赤裸々な冷えた潤いの氾濫。

それらのうちに。

背後の気配に振り返った。

茫然と戸口に加賀淨雅は立ち尽くす。

すべはなかった。

彼にも。
それ以外には。
だからさゝやく。
近づきもせず。
わたしにも。
匍う私にも。
振り返た二本足のわたしにも。
聞いた。
在る耳は。
聲。
さゝやく聲を。
だから聲はさゝやく。
——なに？
淨雅の聲が。
——どうした？
聲はさゝやく。
——あれは…
言葉をなくした一瞬の淨雅のまなざしを見た。
慄きが？
こゝろのどこかに、淨雅の。
まさか。
むしろ彼は赦しさえしてむしろしずかに一度まばたく。
やわらく目を閉じたように。
すぐさまにひらき。
やわらかに目を閉じていたように。
わたしは息をひそめさえせずに淨雅を見た。
彼をだけを。
眼差しにわたしはその夜の記憶を見いだしながら。
その夜の弑殺。
私の掌につかまれた屍。
雀の屍を淨雅は見た。
その屍を。
見た。
淨雅の眼は。
濡れた唇を。
殺されて。
その内臓にわたしの唇を汚した。
鈍足の猫のその血の色を。
——殺しちゃいけない。
微笑むわたしに淨雅はさゝやく。

すでに彼は赦していたかにも見えて。
——殺しちゃ、
——どうして？
微笑むわたしを淨雅は見ていた。
——生き物は…
——食べるでしょ？
笑う。
わたしの唇。
そして喉と。
それらが俱に笑う聲を聴いた。
淨雅は。
わたしと俱に。
——食べたの？
——食べるでしょ。
——殺しちゃいけない。
——殺したじゃない。
ささやく聲の笑んだ色合いを厭いさえもしなかった。
淨雅はひとり。
——猫は殺さない。
——殺したじゃない？
——鳥も殺さない。
——じゃ、……ぼくは？
と。
喉の奥にさゝやかれた聲をわたしは潜めた。
唇にたゞやさしい微笑だけを赦して。
言葉をは決して知らせない儘。
なぜ？
淨雅の爲に。
やさしい彼の。
苦惱する彼の。
加賀淨雅の爲にだけ。
かくて心に娑娑彌氣囉玖
殺したじゃない？
チューブを外して
三月の終わり
むしろ安樂を
窓の向こうに櫻咲く日に
失敗作に？
舞い散る中に
イノチのバグに？

殺したじゃない？
西淨を
土の中で虻はめざめた
鳥雅を
ほそい蛇
殺したじゃない？
その肌は潤う
狂った珠美に知らせもせずに
もうすぐに
彼女の爲に
さなぎを造る
文果とゝもに
いまだに蝶の羽をもたないそれ
停止する
土にはう蟲
装置は。医師の指先に
毛衣の虫も
停止する。その時に文果の
かくて斗璃摩沙
鼻すゝる音
爾に
ぼくたちは聞いた
都儼耶氣良玖
あなたはすでに死んだのだった。
あの夜にも。
鳥雅も西淨も何度目かにももの發熱に夢を見た。
その夜にさえも。
何度目にも。
畸形の子たちを産んだ珠美が心を亂し生ませた男がひとりで死んだあの夜にも。
發作を起こした珠美は咬んだ。
自分の舌を。
茫然としたあなたは鳴らさなかった。
病室のベッドの緊急ボタンをは。
ただ我を忘れて。
かたわらの花瓶の百合の花の花弁の一つが落ちた瞬間に。
咬んだ舌に血を吹いた珠美をひとり見ていた。
瞬きもせずに。
口を開いた珠美はさゝやく。
血を吐きながら。
唇に。

血を垂らしながら。
——だれ？
珠美は云った。
——あんた誰なの？
ふたゝびに見た。
見開いた眼がすでに滂沱の涙を流していたのを。
珠美。
その目。
狂った眼差し。
玉散る涕。
ふるえ玉。
わななき玉。
ゆららぎ玉。
玉散る。
まばたく。
白濁。
睫毛にななめの日差しの。
その綺羅を。
立ち上がった珠美が近寄る儘にまかせた。
——なにをしたの？
珠美がさゝやく聲を聴いていた。
耳元に。
あなたの耳は。
——なにをするの？
ふたつの孔は。
その奥に膜は。
糾弾したにちがい珠美の喉の易しい音色を。
あなたはひとりで聞いていた。
すがりつくように伸ばされたふたつの腕に。
先端に掌。
手のひらが頬をつかむまゝ。
ふれてなぜるようにも。
つかまれたまゝに。
あなたは瞬く。
ふれた。
珠美の親指が雙つ俱にも。
ふれた。
瞼に。
あたなの瞼を。
静かにそっとおしつぶすときにも。

その目を。
押しつぶした時にも。
容赦なく。
のけぞらされた身が頽れる。
容赦なく。
押しつぶす指はあなたの内部を掻きまわした。
容赦なく。
指が掻きまわす内部の組織のさまざまな崩壊。
その壊滅に。
もはや苦痛を感じもせずに。
一瞬だけに痛み逆りあなたはすでにもはや苦痛もなくて。
かくて斗璃伎與娑婆彌氣囉玖

痛ましく
途切れもせずに
痛ましく
散る花を
その悲しみが
盡きもせず
目にうつる
散る花を
すべてのイノチの
白い花
その痛みが
花の散華の夢を見た
痛ましく
冷めた目に
ただ痛ましく
その夢を見た
悲しみをだけ
ひとりでわたしは
わたしは痛む
泣きもしないで
わたしは痛い
涙さえ

かくて斗璃摩娑爾に都舞耶氣良玖爾
散れ。
散る。
花。
散れ。
散る。

花は。
散れ。
散る。
音も無く。
止めどもなくに。
散れ。
散る花は。

亂聲三蚊頭囉岐第二

啞ン癡 anti 鳴溜我貳翠夢 organism II

2021・01・07-08 黎マ



奥書

以上は黎マに依って 2020.01.04-02.04. に書かれたものの前半その一

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

蚊頭羅岐-1

著 黎マ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
